

---

# IRREGULAR短編集

6 1 6

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IRREGULAR 短編集

### 【Nコード】

N6273M

### 【作者名】

616

### 【あらすじ】

物語の世界を舞台にした、群像劇的ファンタジー話のぶちこみ番外集。

ただの番外編もちろん、本編には絶対に反映されない、アフオ話も収納。

シモネタ・女装ネタ・性転換・学園等、パロディ多し。背後注意。  
は本編に関係ありません。

## 登場人物紹介（前書き）

の話は、閲覧注意。

## 登場人物紹介

本編はこちら <http://ncode.syosetu.com/n3018j/>

### 本編あらすじ

物語の世界を守る“管理局”所属の三人の主人公を中心とした、異世界ファンタジーな群像劇。

研修期間三年を一年で終わらせた（元）天才・晴光<sup>せいこう</sup>と、違法者の娘・エリカ、そして最年少の隊長に就任した『禁忌の子』ビス・ケイリスク。

三人は新設部隊“第六特殊部隊”に選ばれ……。 （詳細は本編でお確かめ下さい）

と、言う話の番外編等を載せていきます。

本編には載せられない、アンナコトやらコンナあれ、パラレル裏話設定事情、シリアスギャグなんでもアリ。

エリカ・A・C

第六の紅二点の一人だが、一番の男前。むしろラストサムロアイ（

発音良く)。

イギリスの魔具専門店の一人娘だが、ばっちゃけ魔法よりも剣で突っ込むほうが好き。前中後衛全部こなせるオールマイティキャラ。見た目で騙される黒髪の美少女。

趣味は魔法薬生成と晴光苛め。

「ドSじゃないわ。ソフトSよ。性的興奮は受けないもの。せいぜい、涙目になってるのを見て、若干の高揚感を覚えるくらい……」

周<sup>しゅう</sup> 晴光

赤髪に190センチ越え(まだまだ成長中)の大柄な特攻担当。肉弾戦を得意とする。というかそれしか出来ない。

エリカに散々苛められても、めげずに友達を自称するあたり、馬鹿なのかそれとも真性DMなのか、物議が交わされるところ。

14で能力が開花するまで、普通に日本でバスケット好きスポーツ少年として暮らしていたので、若干の世間知らず。

エリカと同じ年。だいたい十代半ばくらい。同じ年が二人だけなので、凄く友達と思っている。むしろその先もいけたらいいな、と思っている。

一年ちよつとくらい前までは、天才とか言われていたものの、今では跡形も無い。

頭が赤いのは、「俺、バスケット少年だから」。

ビス・ケイリスク

第六部隊隊長にして、みんなの上司。

持病(?)のため、故意に実年齢19歳、外見年齢12歳のリアルコナン君状態。

生真面目で丁寧な、頭脳担当参謀。武器は銃だが、あまり戦わない。天パの白髪・金青のオッドアイの鉄面皮。ついでに敬語キャラ。外見が一番小さいため、『みんなのたいちょう』状態。ポジシヨン・長門を獲得している。

兄のことは凄く大事に思っているが、その反面、色々諦めている節がある。

## ニル

エリカのパートナーの“本”の少年。童顔な器用貧乏。オカン化の一途を辿る。

一応、エリカ・晴光の同い年組よりも二つも上であるが、むしろ年下に見られるほどに童顔。

何故か黄色の服が多い。エリカと同居中。

## ファン

晴光のパートナーの本の少女。14歳で、部隊内最年少。紅一点のもう一人。

医療に特化し、肉体を熟知しているため、肉体強化が得意。若き白衣の天使は、みんなの妹。オアシス

桃色の髪がコンプレックスだが、晴光のために伸ばしている。

## ステイール・ケイリスク

ビスの兄。封印の紋が描かれた布を眼に付けた、長い白髪の長身痩  
軀の男。第一印象は『胡散臭い』。

眼は布と厚い刺繍でどう考えても見えないはずだが、普通に生活し  
ているので問題は無いらしい。日常生活ではむしろ、戦闘員達より  
動くほどである。

本で読んだ(？)知識と、どこから仕入れてくるのかメンバーの個  
人データを把握している。

部隊最年長。最も大人げない大人。体は弱いらしい。  
ブラコン。

次、敵サイド

## 登場人物@敵サイド（前書き）

登場人物が多いため、作品を読む時に見るのが得策です。



## 登場人物@敵サイド

ドーマウス  
DOMOUSE

違法異世界旅行者集団。違法者が経営する喫茶店を拠点に、活動している。

アズマ シオン

エリカ父。絶賛行方不明中。喫茶Aster店長。

元・違法異世界旅行者だが、現在は活動していない。DOMOUSEメンバーのアンブレラとは旧知の仲。メンバーではない。

最近辛かったことは、娘と似すぎていて（顔が）、アンタの遺伝子が気持ち悪いと言われたこと。

嫁と娘がとにかく恋しい、推定30代半ば。

虹

喫茶店員。シオンの弟子。

## DOMOUSEメンバー

### 修道士コンビ

唯メンバー内で、唯一男女(?)コンビでない二人組。

「あれ?お前らってそうなの?」ってくらい仲がいい同年コンビ。

### エルディア

女装趣味の16歳。垂れ目。

シスターの恰好を仕事服にしている。女装すると清纯派。テレポーター。

### エルバート

エルディア男バージヨンの時の名前。

### リユー

背ばかり大きい、影の様な姿をしたエルのパートナー。顔だけ見ると超絶美少女なので、180以上の身長とはいえ性別不明。

黒髪黒目の純日系。自殺願望アリ。異界把握能力者。

## 双子コンビ

19歳大学生兄妹。家庭環境が複雑らしい。二人とも感情が鈍い。

小嶋 凜<sup>リン</sup>

双子兄。幻獣使い。

王子顔のオタク。無駄にフェロモン体質な19歳。男にも女にも人外にもモテるが、基本的に人間に興味がない。  
普段は美大生をしているらしい。

西藤 爛<sup>ラン</sup>

双子妹。

生まれてくる性別を間違えた19歳。こちらは真性王子キャラ。女子は愛いべし。

幻獣調教師。教師を目指して、普段は女子大生をしてるらしい。

## お笑いコンビ

ボケとツツコミ社会人関西人コンビ。動の明と静の忍でバランスはいい。非戦闘員。

志村 明 あきり

ツツコミ。別名・チンピラホストみたいな女。実は25才で、比較的年長である。忍とは幼馴染。

『適齢期』『行き遅れ』の単語でぶちきれ。職業不明。  
真名を引きだす能力者（宛名師）

小鳥遊 忍 しのぶ

淡々としたブラックジョークボケ。別名・インテリ眼鏡。  
アパレル系大手のサラリーマンをしている。気が引き締まるので、いつもスーツ。実はまだ23歳。私服だと、5つは若返ると言う噂。  
明が初恋だったことが最大の汚点。昔、明を『あーちゃん』と呼んで慕っていた。  
言霊使い。

アンブレラ  
情報屋UMBRELLA

情報屋を営むコンビ。

missアンブレラ

DOMOUSE参謀。年齢不詳。青い髪に細いキツネ目の女。  
陽の光を嫌うため、ほとんど外に出てこない。美白の鬼。

シオンとは旧知の仲だが、アンブレラは、昔世話してやった小僧くらの扱い。  
クリスを未来のつがいにしようと画策するが、そのため彼に『シヨタコンばあ』なる悪態をつかれている。片翼の一族唯一の純血の生き残り。

## クリスチャン

アンブレラの養い子。金髪碧眼にそばかすの目立つ12歳の少年。純朴そうな外見に反し、腹黒策士で大人顔負けの話術を繰り広げる。大人が信じられないお年頃。知識は、上流教養からオタク用語までと幅広い。

年の近い虹やチャック、しっかりものなのでミーナの世話を頼まれたりすることも多いが、本人は嫌がっている。  
しかし虹いわく、「ツンデレ」。

## ミーナ

吸魂鬼の少女。おひめさまに憧れる8歳児。けっこうエグイ。

## NYX

DOMOUSEメンバーがかつて所属していた、違法異世界旅行者集団。

リーダーは夜鼠と名乗る男。

一般人への能力埋め込み、人身売買等の、外法な活動が目立つ。

## アン・エイビー

元・管理局員。猟奇殺人鬼。娼婦。エリートと言われるが、6年前に局員・本含め20人を死傷、遺脱する。

ビス・ステイル兄弟の両親と、ファンの家族は、その時の被害者である。

喫茶に来店し、DOMOUSEメンバーに接触してくる。やたらハイテンションな服装・言動で、空気を読めないというか読まない。明が付けたあだ名は『歩く18禁』。

## チャック

アンと行動を共にする。14歳。董色の眼をした“本”の少年。気が弱く消極的。

ダルタン

くすんだ金髪の、中東風の民族衣装の少年。バンダナを頭に巻いている。恐らく18歳くらい。

ジジ

ダルタンパートナー。ごついゴーグルの少年。幼児とも言える体躯。極端に光に弱い。  
言葉を話すことが出来ない。

メンバー

次、異世界管理局幹部

## 戦闘事情

（第六戦闘員の武器のはなし。）

レイピアと刀を足して割ったような武器だった。

根元から枝分かれしている持ち手を覆う装飾は限りなく簡素であり、手の平はもちろん、手首を隠す。

金属の塊である手を置くそこには、滑り止めなのか、ただ単に持った時の感触のためなのか、人工皮の様な、丈夫で光沢のある布が巻かれていた。

持ち主を反映した武器だと思う。母の故郷、西洋のレイピアの外観に、父の故郷の刀刃（くに）を持つ形態。レイピアよりは刃が大きく、しかし刀というには、やや重量がある。

多趣味で何でもそつなくこなす、彼女らしい武器である。

重さはそこそこあるが、それはまあ自分達は“本”を使う夢人だ。肉体強化でも筋力増強でも、能力次第でドーピングは利く。

そもそもこの武器も、その本の力を使って具現化しているのだから、どうとでもなることなのだ。



「これは、少し刃が長いんですね」

武器を持ち主へ手渡しつつ、ピスは言った。

「わかりますか？」

「どうしてそんな形状に？」

「簡単なことです」 エリカは憮然とする。

「リーチがどうしても、女の私だと短いんですよ」

「なるほど」

「あとは、こういったものって、決まった”型”があるでしょう？ オリジナリティを出せば、少しでも不意を付けるかと思ひまして」

「慣れればまあ、使いやすいでしょうね。貴女らしいです」

「隊長のも十分にらしいと思いますよ」

ピスの武器はピストルと、それを組み立てなおして出来るライフ  
ル型である。しかし形は金属の無骨な印象が拭い去られ、長方形の  
外観に、曲線の持ち手を持った 悪く言えば、子供の玩具の  
様なものだった。

色も、金属は金属でも、プラチナやホワイトゴールドなどに近い  
白だ。

観賞用としてはいいが、武器とするにはどうにも頼りない。

「でもこれである弾が出るんですから」

やはり、彼らしい。否、彼自身を表しているようだ。さりげなく  
掘られた唯一の装飾は、迫害される原因でもある本の一族を表す薄  
桃色の蓮の花。形に現れるさりげない生真面目さ、まっすぐ狙い、  
音も無く飛ぶ弾丸、弾け決る鉛玉。その威力。

漂白したように、真白い外観に騙されてはいけない。彼は確かに、  
天才と呼ばれるべき自分達の上司なのである。

「隊長らしい」というよりも、「隊長っぽい」と言いますか・・・」

エリカが呟くと、ビスは小動物染みた仕草で小首を傾げる。「そうですね？」「そうですよ」

「銃にしたのは、単純に戦闘の威力が落ちるからです。この体だとしても身体差も体格差も出来てしまう。ですから、なるべく威力が大きく諜報活動に向く形状にしたいんです」

「それは成功していると思いますよ」

「ありがとうございます」

子供の体に大人の頭脳、とはまさに彼のこと。もとより戦闘には向かないのだ。

前線で特攻のどこその馬鹿や、前衛・中衛・後衛・諜報とマルチにこなすエリカに比べると劣るが、それをあそこまで引き上げることが出来ていれば十二分に成功していると言っている。

彼の武器は頭脳である。人を使う能力だ。

「隊長になるまでは単独任務が多かったですし、大分楽になったんですよ」

（お上もよくやるわよね）

きつと彼もわかっている。十中八九嫌がらせだろう。この異端の

兄弟のここまでの苦勞は、付き合いが短い自分達でも語らずとも、  
うかがえる。

戦闘には無いその能力が、今認められつつあるというのは喜ぶべきことである。

ビスは武器を懷に仕舞い、息を吐いた。いつもの鉄仮面にやや満  
足げな表情が浮かんでいるのは、見間違いではないだろう。

自分の武器を褒められるのは、いいものだなとエリカも刀身を撫  
でた。

会員制喫茶ASTER「チンピラホスト」

talk 1

忍「なんや、落ちこんどんのか？」

明「慰めはいらへん！その半笑いやめえ！」

シオン「……どうしたの？」

忍「聞いてえや、店長。コイツな……」

明「生き恥晒させる気か！」

忍「コイツ、歓楽街歩いとならナンパされてん」

シオン「へー！良かったね。で、どうしたの？」

忍「いやいやそれが、相手が成金っぽいオバはんやったんや」

明「言ったあーっこいつ言いおった！止める言ったのに！」

忍「しかもその文句がな、『お兄ちゃん、今晚いくら？』」

明「このド鬼畜が！その眼鏡真つ二つにしたるか！」

忍「うつさいチンピラホストみたいな格好しておってからに。そんなんやから嫁の貰い手がないねん」

明「ガーーーーッ！それ言うか！？このインテリ眼鏡が！」

t a l k 2

リン「俺、気付いたんだよね」

ラン「？」

リン「なんで明が、男に間違えられるか」

忍「……普段の素行やろ」

リン「でも良く考えてもみてよ。明って背もそう高くないし、だいたい背の高い忍っていう比較対象が居るわけじゃん。服だって、色が綺麗なのを着てることが多いし」

忍「色が良くても、形がなあ……アイツが着てんのん、メンズスーツやで？身長も165あるし、それくらいの男は多いやろ」

リン「もつと根本的な問題だったんだよ。ついでに改善策もある」

忍「なんやそれ」

リン「……化粧だよ」

ラン「ああ、なるほど」

忍「はあ？」

リン「背ならランの方が大きいでしょ。170あるんだから。服だって同じようなパンツスーツ。色はランの方が黒とか茶色とか地味。髪も明の方が長いじゃない。比較対象なら、ほぼ同じ顔で男の俺が居る。」

忍「……言われてみれば……」

リン「なのに何故、男に間違われるか？それは化粧だよ」

ラン「あれくらいの年の女性で、あの格好っていうのが珍しいんだよ。だから間違われる」

忍「……女は25過ぎたら、化粧しな外出たアカンってオカン言うとしたなあ、そういえば」

ラン「でも肌綺麗だよ、明」

リン「せめてリップとチークだけでもすればいいのに」

忍「……あいつがやっても、キモいだけや思うで」



## 会員制喫茶ASTER

基本的に、舞台は喫茶店内。

talk3

リン「ねえ明」

明「あん？」

リン「明って、女の子の恰好はしないの？」

（ラン「あ、言った」）

（忍「ようまあ、直球勝負やな、あいつは」）

明「……なんの話や」

リン「んー……好奇心？」

明「なんやってもなあ……」

リン「じゃ、何でしないの？」



明「そりゃ……めんどいからやな」

リン「ああいうのって慣れじゃない？」

明「いや、出来んことはないねん。ただ手間と金がかかるからな。使ったら無くなるのは当たり前やし、オフまでそんなん出来へんやん？」

リン「普段はしてるの？」

(ラン「普段はしてるらしいけど」)

(忍「俺、あいつが成人式以外でそういうことしてんの、見たことないで」)

虹「何やってんすか？」

(忍「…しっ！」)

明「普段ぴっちりやってる分、なんかなあ……」

リン「ふーん」

明「ああいうのはな、戦闘服やねん。あんなんやってつと、どうしても扱い抜けへんつちゅうか……仕事モードが抜けへんねんな。仕事ん時はええで？けど、ここでこうしてだべってる時までそういう気分になんのは嫌やねん」

リン「……んー、わかった」

明「おう」

リン「明はそのままでもいいよ。うん、そのままがいいね」

明「……こっばずかしい男やな！ヨソで言いや、そういつのは」

t a l k 4

忍「謎が残ったわ」

リン「そう？全部丸く収まったと思うけど」

ラン「残ったよ」

虹「残りましたねえ」

忍「ビックリや……驚きの新事実やわ……まさかこの俺が……」

リン「何？」

忍「俺、あいつの仕事知らへん」

ラン「まさかだよな」

虹「ウチでいつもゴハン食べていくってことは、収入があるんでし  
ょうけどね」

忍「……15年間一緒に居てきて始めてや、こんな」

ラン「凜、知ってる？」

リン「そついえば……知らない」

忍「なんやあいつ……」

リン「聞いてみたら？」

忍「阿呆！今更そんな言えるかいな！あつちは俺の学歴・家族構  
成・就職活動の面接しにいった会社の数と順番まで知ってんねんぞ  
！」

虹「どんだけー」

ラン「幼馴染って、凄いな」

リン「ね」

虹「ていうか今更そんなの聞いたら、確実に鼻で笑われますネ」

忍「ありえへんし、とか言われねん！拳句、ウチの親にまで伝わる  
わ！ああ……正月に帰った時に言われる昔話に殿堂入りされる……  
……！」

ラン「ああ、家出てると、たまに会った時色々アレだよな」

忍「……おっそろし。プライバシーなんて無いで、ウチの親。明の親が、何故か俺の生まれた日の天気を知ってんねん。ウチの親は明に初経が来た日知つとるし……」

虹「ご近所さん情報ですねー」

ラン「……ていうか、わたし達が聞きに行くっていう選択肢は無いの？」

リン「面白いからいいじゃん」

## 会員制喫茶 A S T E R（後書き）

我が家があるのは、京都よりの北大阪なので、関西弁が微妙にちがうかもしれない。

ついでに家庭環境が、鹿児島弁（坊津弁）と和歌山弁と標準語も飛び交う環境なので、色々混ざってるかもしれない。

ご指摘お願いします。

## 会員制喫茶ASTER「インテリ眼鏡」

talk 1

虹「明は宛名師ってなってますけど、詳しく言つとどんなのの事を言っくんすか？」

クリス「『真名を引き出し、言い当てる技術を持つ術師』のことだよ」

エル「適性がないと出来ない特殊技能だよ。真名っていうのは“本当の名前”、つまり魂に刻んだ名前だね」

明「占いみたいなもんやで、あんなん」

虹「見ただけで名前が分かるってこと？」

明「極端に言ったら、そうやな」

忍「で、俺はそれを使って言霊を使う、ちゅうな」

エル「お笑いコンビはよく役割分担されてるよねー」

クリス「真名が分かってくれば、効果は桁違いだからね」

忍「お笑いコンビとは遺憾やな。こいつがただ単に、勝手にツッコんでくるだけや」

明「ウチのせいか……！？不可抗力やる……」

talk 2

エル「はい恥ずかしいことカミングアウトタイム！」

リユー「……」

忍「オイエルディアちゃんよ、お前の相方の目え見てみ」

クリス「……酔ってんの？」

虹「ウチは未成年にお酒は出しません！」

エル「だって忍って、なんかスキが無いんだもん。いつもビシッとスーツでさ。熱くない？」

忍「俺、一応大人やから」

虹「まー、それにしても老け過ぎですよねえ、小鳥遊さんは」

クリス「ただ単に服のセンスが悪いとか？」

忍「いやいや俺、これでも、社のお姉ちゃんにランチ誘われたりするから。どこぞのチンピラホストと違って」

リユー「（なんでいきなり標準語？）」

忍「それにウチ、実家も礼服店やからな」

虹「青？」

忍「や、田舎の商店街のちっさい店で」

虹「ていうことは、志村さんも同じ出身なんですよねえ」

忍「せやな」

エル「あつ、はぐらかされた」



## 会員制喫茶ASTER

talk3

エル「て、いうことで。教えてください忍のはなし」

明「あん？なんでやねん。何が何でそういう話になったんや」

クリス「今後のために」

虹「あー！クリス弱み握る気だー！」

クリス「何それ気持ち悪い話し方。ドン引き」

リユー「（口でドン引きとか言うなよ……）」

忍「…何やつとんねんお前……」

エル「わっ来た！」

虹「あらら」

クリス「あーあ」

エル「色々みんなのこと聞きたいなー、って思っで。ほら、仲間で

しょ？僕ら」

クリス「そうそう。僕等突き動かすのは好奇心だよ！」

虹「あはっクリス12歳っぽくてキモーイ」

明「クリスは正真正銘12歳やろ」

忍「いけしゃあしゃあと……思っくらんくせに……」

明「よし姉ちゃん話したろ！忍はなあ……いてっ」

忍「オイコラア」

明「けっ面白みのないインテリ眼鏡やの。かっこつけおって、可愛くない。」

あゝあ、昔はあーちゃんあーちゃん後ろついてきて、可愛い雛っ子しいちゃんはどこいったんやら」

忍「あッ！てめー！」

talk 4

明「あだ名の由来？」

リン「そう」

明「そんなもん見たまんまやろが。眼鏡がインテリっぽいからや」

ラン「でも忍は眼鏡取ってもインテリっぽいよ」

リン「そうそう。なんか頭良さそう」

明「実際良いやろ……」

リン「え？何？あーちゃんのお墨付き？」

明「あーちゃんはいしいちゃんのお姉ちゃんやから……って、何言わすのんこの子はっ！」

忍の眼鏡は、四角い銀フレームのシンプルカッコイイやつである。

喫茶ASTERのタイトル名になっているあだ名は、基本的に明命名です。

## フェイト＋ページェント「根積みと根子（リンネ）」（前書き）

フェイト（Fate）

・（原義）運命を意味する英語

・ the Fates - モイライ（運命の三女神）

覚えている。覚えている。

僕は覚えている。

忘れることは許されないのだ。

僕は覚えている。だからこそ、その記憶のために行動しなければいけないのだ。

もし君に、小さな頃やらかした小さな過ちがあったとして。

君はそれを覚えているわけだから、当然、それを経験として戒めるだろう。僕のそれは、そういうことである。

むかしむかし、愛した人が居た。

その人は僕の代わりになって死んでしまった。そして僕は、その人に出会うために待っている。

そういうことである。

・・・そういうことだった。

ページェント (pageant)

- ・正しくは「パジェント」。日本では誤った発音で流布した。
- ・歴史的な場面を舞台で見せる野外劇のこと。あるいは祝祭日などに行われる仮装行列や、華麗・大規模なショーなどのこと。
- ・特にクリスマス聖誕劇のことを言う。これは、新約聖書の福音書に記された、イエス・キリストの誕生にまつわる様々なエピソードを象徴的な形式の劇にまとめたもので、今でもキリスト教系の幼稚園や学校などで行われている。
- ・パジェントとは「ページを開く」と言う意味の言葉から来ており、歴史的な出来事の場面を本のページをめくるように次々と表現し、造っていくという意味である。

## フェイト＋ページェント「根積みと根子（リンネ）」

むかし、むかし。

誰も覚えてなどいないが、私達だけが覚えていることであるが、確かに在った、お話です。

根積み様という、生き神様がいた。

彼は人の子から生まれた、神様の御子だった。

綺麗な命の色の赤毛に、黒い瞳の御子だった。

神様が変わって彼を産んだ両親は、彼のために社を構えてやり、大切に育ててやった。

と、根積み様が10になったある日のこと。

彼を産んだ両親に、二人目の子供が生まれた。今度はきちんと、真っ黒い髪の女兒である。

しかし開いたその瞳は、真っ赤に命の色に濡れている。

両親は驚愕したが、彼女を神からの使いだとし、三つになると巫女として社に上げた。

彼女は使いとはいえ、人である。神には連なることはない。名は、『観子』とする。

観子は美しく育った。

根積み様は彼女をたいそう可愛がり、観子を根子と呼んだ。

根積みは毎日のように、奇跡を起こす。

人は、村は、どんどん豊かになり、町になり、果ては国となった。長い長い時がたち、根積みの名は遠くの大国にまで届くようになる。

「かの地には、血の色をした肌の、黄金を創る神が居る」

「なんでもその神は、とても美しい御子だとか」

それを聞いた大国の皇帝は、その御子を自分の息子の妻にしようと考えた。

根積みと根子は、今や美しい青年と娘である。奇跡は絶えず、村だった社で起こる。

社はいつしか、村ほどにも大きくなっていた。

とある日のこと、戦が起こった。

ドーン。国の海に大砲が撃ち込まれたが、国に居た根積みには届かなかった。

ドーン。国の端に大砲が撃ち込まれたが、国の対岸に居た根積みには届かなかった。

ドーン。国の中心で暴動が起こったが、広い社の奥に居た根積みは気付かなかった。

「ねえ、根積み様。少しうるさくないかしら」  
根子が言った。

「そうかい？」



根積みは首を傾げ、「確かに」とうなづくと耳をすませる。

「大変だ。海の方この大国が、お前をめとるため攻めてきた」

大国の皇子は言った。

「血のように赤い肌をしているのなら、子を産んだらその肌も赤いのかい？」

ドーン。ついに社に大砲が撃ち込まれた。

めらめらと燃える炎の中、ずっと立ち上がった御姿がある。炎を割って、血の様な髪を靡かせて、根積みが姿を現した。

「私が欲しいか、皇子よ！」

叫ぶその御姿を見て、皇子は気色ばんで言った。

「なんてこと！血のように赤いのは髪と眼ではないか！」

肌はつるりと白い。唇は綺麗な紅色である。

皇子は生き神を連れ帰り、城に迎え入れた。

しかし婚儀の前日、湯浴みの時である。ずるりと赤毛が剥け、肩ほどまで短い黒髪が現れた。

激怒した皇帝と皇子は、根子を磔にした。

首にかかるほどに短くなった赤毛の根積みは、社の奥の奥、鍵のかかった部屋の中、根子の名を呼び倒れる。

今や小さな国は、大砲でできた穴が家々を潰し、もとの小さな村ほどになりつつあった。

「根積み様、根積み様、奇跡を起こしてくださいまし」

悲しみに暮れる根積みは、とたん激怒した。

「根子、根子、」妹の名前を呼び、根積み様は海に消え、国も朽ちたのである。

遠い海の方、根子の墓の前で根積みは言った。

「おまえがまた生まれるのを待っているよ」

この物語は、そこから始まってしまったのでした。

フェイト+ページェント「根積みと根子」(リンネ)「(後書き)

本当のプロローグ。

## 貴方の弱点：晴光

タイプ：1：周　晴光の場合。

「貴方、弱点多そうよね」

「っはあ、ふう、今、そういうこと、言うか！？普通！」

肩に剣を担いでふんぞり返る彼女を見上げ、晴光は歯を剥いた。

久々の模擬戦訓練である。管理局戦闘員（夢人）の訓練は、いざ入隊すればそれぞれ任意であるが、そのため各自が自主的にこういった模擬戦を行うのだ。

演習場は広く、三パターン。

室内戦、またはそれに準ずる、狭い空間を予想した第一演習場。（地下にある。）

半ドーム型、コロシウム風の第二演習場。（よく壊れる。）

そして今居る、森林での諜報、ゲリラ戦を予想した第三演習場。（野生動物豊富。）

「だいたいね、攻撃するのはいいけど貴方、外して木を倒すじゃない。そうすると自分の道と視界塞いじゃうってことにどうして気付かないのよ」

「せ、戦闘方法が俺とエリカじゃ違うんじゃない馬鹿野郎！くっそう、バカバカ死角から攻撃してきやがって……」

バリーン。読んで字のごとく、雷が落ちた。「これのこと？」

「キヤーツ晴光くん！」

安全地帯に隠れていたファンが駆け寄るも、晴光は地に伏しピクリともしない。慌てて彼女は治療を開始した。

「えええ……エリカ……」

エリカのパートナーであるニルは、蒼い顔でおろおろと同僚を見る。エリカの剣から伸びた青白い雷鎚は大きく弧を描いて湾曲し、鞭のようにしなって晴光の背後から体当たりしたのだ。なんてこと。

エリカはうつそりと口元を歪め、「使えるわね……」禍々しく、そう、まるで悪魔のように笑ったのだった。

「今の……新技？」

「そうよ。ほら晴光、また今度奢ってやるわ。じゃ、」

「コラテメエエリカ！」

「晴光……」

君の弱点はそう、その扱われやさだ。そう指摘したいのをニルはそっと飲み込んで、小さく溜息を吐いた。

「僕も今度、何か奢るよ……」

「まじで？えーっと、じゃあ……」

（実験台にされた彼）

## 彼についての考察

周晴光という少年は、外見通りとても分かりやすい人物だった。考えたことはすぐ顔に出る。

考える前に体が動く。

そもそも、考えることが大の苦手。感情のおもむくまま、実に楽しそうに生きているというのが、最初の印象だった。

悩みと言えば、よく名前を間違えられることだとか。「はれみつ」でも“せいみつ”でも“はれひかり”でもないからな!”せいこ”だから!”

そんな彼の実家はお寺らしい。聞けば、なるほどお坊さんの様な名前である。

同世代にしたら、随分と大きな背(180ある)、昔所属していたクラブ活動、趣味はバスケットボール。ゲームはRPGとミニゲームのいっぱいあるやつが好き。

この本の世界ではそう珍しくは無いけれど(自分も大概だと思うし)、彼は真っ赤な頭をしている。もちろん、染めたものである。彼の健康的な良く日に焼けた姿とその赤い髪は似あっていると思うのだが、どうも真面目な人には眉を鎮められがちだった。

けれどあの色は象徴だという。何故赤なのかと聞くと、少し渋って「バスケしてるから」の答え。

嘘が苦手な性質のためにバレバレだ。他にも理由はあるように見えたが、恐らく答えてはくれないだろうあの様子だと。

見るからに行動派の彼の得意分野と言えば、もちろんのこと戦闘である。

戦い方はとてもシンプルだ。よける、かわす、パンチ、キック。それだけ。（場合によっては頭突きもする）

それでもその戦闘だけで研修を卒業して、第六部隊の特攻担当なのだから。感嘆の息を吐くのみだ。天晴。

しかしその分、諜報活動が苦手なのだが、（演技が出来ない性質だ）それはまあ、第六には他にそれが得意な彼女が居るのでいい。

そんな彼、どうも同世代からは嫌われるようだ。年上・年下からはとても人気なのだが、うちの部隊で二人きりの同い年コンビの片割れは、どうも微妙なライン上で彼を見ているらしい。

『好き』と『嫌い』の間といったところだろうか。

彼は底抜けに明るいが、明るい人間が好まれるわけではないということか。笑いながら障害を軽々と越えていくその姿に、同じ土俵の上に立つ者としては面白くなのだろう。

本人ははたして気付いているのかいないのか。．．．．．  
ないだろうな。

まさか自分がそんな眼で見られているなんて気づいていないだろう。なにせちよつと彼は頭が緩い。

例の同い年の彼女の言葉を借りるなら      体ばかり大きくてちよつと馬鹿なのだ。

まあ、馬鹿な子ほど可愛いというし（だから年上に可愛がられる）、頭がよすぎるのも問題だと思うわけだから（俺はちよつと馬鹿な方がやりやすくて好きだ）、あわよくばそのまま育ってくれれば．．．  
・とか思うんだけどね。

スタイル・ケイリスク視点。

お兄ちゃんからちよっとお馬鹿なあの子へ



## あの人についての理解

ビス・ケイリスクと言う人は、わたし達本の一族にとって、禁忌の象徴ともいえる『禁忌の子』だった。

わたし達は幼少より「禁忌がいかにも恐ろしいか」について語られ、比喻でなく刷り込まれて育った。けれどそれはとても縁遠いもので、親戚知人にも一人も禁忌を本当に起こした人なんていなかったし、半ば都市伝説の様な気がしていた。

けれどそれはとても身近なことだったのだ。今ならそう思う。

禁忌が何故生まれるかに付いて話をしよう。

わたし達の言う禁忌とは、『異種族交配』、一族以外の人間との交わりである。

わたし達は特殊な一族。けして『特別』な一族ではないけれど、血肉が力の糧となるわたし達の体は恐らく、他の人間達には『特別』に成り得るのだろう。

だからわたし達は、あまり外（世界）へ出ない。

特徴と言えば、淡い色で縁取られる瞳（そのため、瞳に円が浮かび上がっているように見える）、人によって違う鮮やかな色彩の髪、そしてその髪はほとんどが背より長い長髪にする。

知っている人が見ればとても目立つ特徴だ。

実際、人身売買の餌食にされるのは過去の話では無いし、ここ百年ちよつとの管理局の生活文化への浸透も一部、伝統を重んじる面々が問題視している。

ビス・ケイリスクと言う人（それとそのお兄さん）は、そんな時に

生まれてしまった『禁忌の子』だった。

お母さんが本の一族で、お父さんが夢人、管理局員。パートナー同士だったらしい。

運の悪いことに、そのお母さんは『青』の本の一族の長の縁者で、波も大きかった。ご両親亡き後の今も、その波の余波は未だに収まることを知らず、この兄弟を苦しめている。

実のところ、最初わたしは始めて見た『禁忌の子』にとっても驚いた。禁忌の子の印は、絶対に一族に現れることの無い、純白の髪。

そして視覚に感覚の70パーセントを頼る人間は、力の増幅剤である本の血を半分も流せば、多くの場合視力を失う。この兄弟の場合、お父さんのほうの能力も継いでいたから、視力は大丈夫だったらしいけれど、わたしはこの第六部隊に来てから一人だけ、同じ『禁忌の子』で、盲目の人に会った。

白く濁ったその瞳は、もともと父と同じ色だったんだ、と彼は話した。

わたし達一族で白というのは、『無』『荒廃』『破壊』の意味とされる。

『壊し』『荒らし』『廃れ』、そして『無』になる。そこからは何も生まれない。だから禁忌。

わたしの『色』は白に近いから、あまり良い顔はされない。だから想像するのは、他の一族の人よりは容易いと思う。

……実のところを言うと。わたしはあの兄弟のお母さん、『ロキ』さんに憧れて医療分野の道に入ったようなものだ。

ロキさんはもともと薬師と医師を兼任する医療系の本。天才と言われ、数多くの人間を救った。でも変人と言う噂も多く、いきなりバツサリ髪を切って短髪にしたとか、客に毒を盛るとか、患者は良くなると実験台にされるとか、二人を産む前も十分に噂の人だったらしい。

数ある理由の一つに彼女が居る。この共通点は、少しだけわたしに勇気をくれた。

隊長は寡黙な人。無口で表情も少ない。でも口調は丁寧で温厚な人だ。

本というよりも、お父さんのほうの夢人の血が濃いらしく、日々本の血と片翼の血と闘っている。体の年齢が幼いのもそのせいだ。

（お兄さんの方にも言えるけど）これはわたしの医師見習いとしての想像で、たぶん体も強くない。

顔色はだいたい白いし、隈を作ってくる日も多い。何分真面目な方だから、毎日必死で頑張っているのだろうことは想像に難くない。わたしも良く言われるけど、色素が薄くてパーツが小さい分、ぽつきり折れていしまいそうだ。将来隊長のお嫁さんになる人は旦那さんの体調管理に苦労すると思う。

隊長は優しい人で、色々なものの裏側を見ている気がした。それはお兄さんにも言えるけれど、隊長は顔を隠してない分、よくわかる。もしかしたら目線が近いのもあるかもしれない。

ファン視点。

妹  
弟。

ファンは無意識にビスを弟扱いしている節がある。あんまり話さないけど、（医者だから）よく見てる。

## 彼女についてのレポート

エリカという少女の考えは、秀麗な容姿に似合わず、あまりにわかりやすい。

手段は狡猾に。

常に可能性を考える。

良く知らない人物に借りを作らない。

約束は忘れるな。

分かりやすいが、これではまるでヤクザの規律のようである。

しかしこの戒めは、エリカと言う人物をほぼ絶対的に防御することが出来るのだ。ある意味で彼女は保守的だった。

同期の周 晴光とは真逆と言える。

そもそも彼女に敵は多い。

『落ちこぼれ』などと比喻されていたのは事実だが、彼女はその分、通常より倍の研修期間の間、とことん鍛錬を重ねてきた。その分、そこいらの中堅隊員よりは仕事はできる。

持ちえた能力的にも、彼女の得意とする接近戦の剣と、中距離・長距離戦を力バーできる魔法、さらに頭も悪くは無い。演技もできる。団体戦は少し苦手だが、それをうまく使うことが出来る人物

そう、ビス・ケイリスク第六部隊長のような 居れば、そう

大したことではない。

オールマイティにこなす彼女は、性格と女子の体力の面を除けば、かなり有能なのだ。

しかし彼女には、いくら保守的になろうとも変えられない事実が存在する。件の父親である。

彼女の父 東 シオンは、彼女が生まれる前日に失踪、未だ行

方は不明だ。

その父親、シオンはかつて、違法異世界旅行者として、局に指名手配されていた人物である。罪状は、『物語の介入と改変』。

異端として、最も多く、そして最も重い罪だった。それも彼は一回や二回ではない。故意に数十回、細かいものまで集めれば数百数千。『東シオン』の名前は有名だ。まず管理局内で、10年ほどのキャリアを持った夢人隊員に訊けば、必ず名前は挙がる。その姿を見た人物も少なくは無い。

黒髪に紺色の瞳の優男　　運が悪かったと言えるのか、奇しくも、彼女は父と瓜二つだった。それはもう、母親が遠ざけるほどに。

彼が全盛期だったのは、力の安定しない十代のころ、ひっきりなしに安定しない能力のせいで世界を渡っていたらしい。今のエリカと同年代のころだ。

優しげでほぼ笑みを絶やさなかったというその男。刃を向けると、驚くほどの抵抗を見せた。

守っていたのは、自分の身と仲間。

しかし、それ以外には見向きも容赦もしないというのだから、そこに娘との血のつながりを感じる。

柔和な雰囲気少年だった。大柄とは到底言えない体躯は、ある時くらいまでは少女のようにも見えた。エリカの母いわく、「臆病だった」。が、それ以上に守ることに关してはある意味では鬼だった。

守られた者達からしてみれば、彼はそれこそ神様だ。しかし敵であるこちらからしてみれば、悪魔としか言いようがない。

善人ではなかったが、悪人でも無い。どっちつかずの存在は、こちら側から見ればただの犯罪者だった。

エリカは曾祖父に、『お前の父親は逃げたのだ』と言われ育ったという。その半面で、母や父を知る者たちから『誇るべき人物だ』と

言われる。

そうやって積み上がってきたエリカの考えは、彼女の保険なのだ。彼女にとって、『害があるか』『害がないか』の選択を見誤らないようにする保険。自分で見て、考え、行動する。

何を一番に信じられるか？それは自ら見たものだろう。

エリカの父親から受け継いだ紺色の眼は、確かに真実を見極める力があると思う。だからこそ僕は、彼女と一緒に居られるのだ。

ニル視点。

ミスター・ノーマルとミズ・アブノーマル。

背中合わせの信頼です。

## ラブレター：親愛なる貴方へ

アイリーン・クロックフォード様

お元気でしょうか。忘れられていなければいいのですが、シオンです。どうせ元気なのでしょうね。

気が付けば、16年の年月が経っていました。君と出会ったのが14の時、最後が20だったので、もうとつくにあの6年間を二回半ほど繰り返せるほどになってしまいました。

貴女が俺を待っていてくれるということ、懲りずに期待しているのですが、いかがでしょうか。

こんなことを言える立場ではないのですが、それでもあの時にきちんと誓ったつもりなので、忘れないでいてくれると嬉しいです。

貴女と一緒に居れなくなって、俺は弱くなった気がします。

身体的な面では、我ながら立派になったとは思っているのですが、どうしても精神的には弱くなりがちです。そちらはどうでしょう？

お義父さんはお元気でしょうか？お世話になったので心配です。ど



うかもう棺桶に近付かないよう。

エリカは元気にやっていますか？美人に育ったでしょうか。

そちらは子育てに関して一抹の不安が残るのですが、ちゃんと女の子らしく育っているのでしょうか。貴女の過去の栄光が、目蓋に浮かんでは消えます。

貴女は覚えていますでしょうか。貴女の取り巻きの女子は、とても怖かった覚えがあります。せめて、彼女達のようににはなりませんように気を付けて。

父が居ないことで、大変迷惑を掛けたと分かっています。いや、貴女ならそこも上手くやるのでしょうか。

「帰れなかった」ことは真実ですが、「帰りたくなかった」ことはありません。俺は貴女の死を見届けて死ぬつもりでしたし、出来れば家族三人で暮らしたかった。（お義理さん抜きで。）

アイリさんは俺よりも肝が据わっているので平気かもしれませんが、たまに俺の話もエリカにしてくいていたら嬉しいです。絵物語でも、一応父親の存在くらいは感じられたら、と思います。

貴女とエリカは俺が、生涯掛けて幸せになってほしい人です。

その生涯を16年無駄にしてしまいましたが、出来ることなら残りで返上したい気持ちでいっぱいです。色々やる事が出来てしまつて、いつになるか分かりませんが、俺の場所はまだ残してくれていいのでしょうか？

お茶目なお義父さんと貴女なので、とても不安です。

P S 、エリカの仕事を風の噂で聞きました。エリカとは、出来れば仕事以外で逢えたらいいと思います。

幸せになるべき人へ。

アズマ・シオン



## Re ラブレター：親愛なる大馬鹿者へ

東シオン様。

こちらイギリスは相変わらず日陰日和で埃臭く、そろそろハウスダストが気になる季節となりました。

エリカはつつがなく元気に育ち、埃にまみれた我が家に負けず持病も無く、美人に育ちました。

親の欲目というなかれ。貴方も見れば、必ず同じことを言うはずで

爺は元気で、いささか元氣過ぎて腰を痛め、あの得意技が出来なくなりました。ええそうです。初対面で貴方を大いにビビらせた、あの動きです。可哀想に、生きがいを私に取られた今年の夏は、ずっと機嫌が悪かったです。

きつともうあの人は天国には行けません。地獄に行けば、恐らく私の親愛なるお父様が仁王立ちでいらっしやると思いますので、よろしくおねがいしたいと思います。

さて、貴方は覚えていますでしょうか。

私はこれでも貴方の妻となるはずだった女ですので、あの約束は一応保留としているのですけれど、いつまで待てばよろしいのか。疑問は解消されません。

彼女の手料理を箸を目の前に待たされ続ける、そんな彼氏の気分です。

手料理が美味しいかどうかを、まだ味わっていないのでなんとも言えないのですが、この場合楽しみに待っていても私は腹が満ちるのでしょうか？

だって貴方がああ言ったので、私は未だに旧姓から離れられません。娘もすっかり16年その名前に付き合って、その名前のまま立派に羽ばたいて行ってしまいました。

私と娘はいつ東の姓を名乗れるのでしょうか。それとももう、貴方はそれを私にくれないつもりなのでしょうか。迅速かつ、貞節を守った回答を求めます。

親愛なる大馬鹿者へ、私はもともと子供は二人くらいが夢なので、あと10年以内に帰宅することを望みます。

貴方のアイリより。

**R e ラブレター：親愛なる大馬鹿者へ（後書き）**

いつまでも待ってやると思ったら、冗談じゃないよ。

彼女の両親・爺は本編に関係ありません。

フェイト＋ページェント「浮雲と鴉（リンネ）」（前書き）

覚えている。覚えている。

僕は覚えている。

忘れることは許されないのだ。

僕は覚えている。だからこそ、その記憶のために行動しなければいけないのだ。

もし君に、小さな頃やらかした小さな過ちがあつたとして。

君はそれを覚えているわけだから、当然、それを経験として戒めるだろう。僕のそれは、そういうことである。

むかしむかし、愛した人が居た。

その人は僕の代わりになって死んでしまった。そして僕は、その人に出会うために待っている。

そういうことである。

……そういうことだった。



## フェイト＋ページェント「浮雲と鴉（リンネ）」

ここが何処であるかなどは、僕にとって関係無かった。ただ僕は、そこで求められることをするだけだ。

名前もその都度変わったし、良く使う二文字の羅列は、『エル』だった。それにはこの二文字が、一番良く使う偽名二つに含まれているから、という理由がある。

偽名一は『エルディア』。こちらは、女の恰好をした時専用の女名。偽名二は『エルバート』。こっちは男名。

偽名は他にもいくつも持っていたけれど、この二つは良く使った。由来などは無い。多用していたら、いつのまにか本国では、それが本名ということになっていた。

僕に親は無い。

いや、戸籍上は存在する。

それは仕事上の上司であり、上官だった。僕は軍に所属している。

僕は軍人だった。名前ばかりの、軍服を着られない軍人だった。

遙か昔にもらった軍服は、とつくに小さくなっていて着られないだろう。それほどまでに、軍服を身に纏えない軍人だった。

僕の仕事は諜報。敵国に何も知らない『誰か』として入り込み、相手国にとつての『駒』になる。

僕は子供で、けれど大人の思考が分かる子供だった。僕のような子供は使い勝手がよく、沢山の中でもグンと飛びぬけた才を持つこの僕はよく多用された。

自国は軍事国家でも民主主義国家でもない。僕は自国を所有しているのが誰かは知らなかったが、知る必要も無く、ただ父であるその人の命で、どこでだって飛んだ。

12、3になるころには、諜報だけでなく暗殺も出来るようになって

たし、体が出来上がってきたことで、変装の幅も広がり、今思えば僕の全盛期だ。

自国での地位は上がり、いつのまにか父によって出世していたけれど、僕は前以上に自国に居る時間が無くなっていった。

『エル』の名前は神を指す。神は雲の上に居るものだけれど、一介の軍人でガキにはおこがましいと、その足元にある雲に例えられた。

神の乗る雲が陰らせる国は、天の雷鎚が落ちて滅びるのだ。

僕の髪色と眼の色にも掛けられていたのだろう。

僕の髪は曇天の様な灰色で、瞳の色はその間から見える青空の様なくすんだ空色だった。

諜報員としての最後の仕事はどういうものだっただろうか。

今や僕はそれを思い出せないのだが……。

とにかく、14になったころ。

僕は自分の生まれを知らない。知ろうとも思わない。後から思えば、僕はあの仕事が好きだったのだろう。『誰か』になる仕事が好きだった。

仕事中、僕は良く笑う。それは嬉しかったからだ。逆に、僕は自国に戻るとむっつりと口を閉ざし、表情も軍人らしく硬くなる。

そんな僕だ。可愛くない子供だった。

（でもそういう風にしたのはそっちだろう？とも思っていた）

（軍人にしたのはそっちだ）（だから僕は、国に帰ると軍人になる）

とても可笑しいことに、僕はそういう風になっていた。

僕はいつのまにかそこに居て、軍人では無くなっていた。14のころだ。それだけは覚えている。

僕にとつては、そこからが明確にくつきりと僕の中に残っていて、その前はとても小さな頃のように霞んで良く見えない。

それはもしかしたら、とても恐ろしいことかもしれない。

いつのまにか居たその場所で、僕は『エル』として、良く笑うようになっっていた。いつのまにか。

おぞましいほどに、中身をそっくり入れ替えたように……そんな風に、良く笑う『誰か』になっっていた。

## フェイト＋ページェント「浮雲と鴉（リンネ）」（2）

そいつは可笑しな奴である。

僕より二十？も大きな背をしていて、けれど僕よりもずっと大きな眼をしていて女装した僕よりもずっと可愛いらしい。黒髪に黒い目の真っ黒いやつで、いつもオドオドビクビクと肩を小さくすぼめている。

「彼は、貴方と同じ年ですよ」

『組織』の奴は言った。「貴方、少し彼と『友達』になってくれませんか？」

「どうして？」

「まあ短絡的に言うとな、彼、友達居ないんですよ」  
グリムは変な奴だ。

僕よりも小柄な鷲鼻の彫りの深い顔立ちをした医者で、敬語を話すくせして、ちっともその言葉づかいに敬いを感じさせない。うわべだけの社交辞令で固められた奴だった。素は結構、口が悪いのかもしれない。

僕は彼（彼女？）の、薄く緑色がかった金目を見つめた。

「なんで僕なの？」

「ここには貴方くらいなんですよ、彼と同じ年くらいの男の子。貴方は社交的ですし、得意でしょう？そういうこと」

「僕、そんな奴知らないよ。グリムは？グリムも同じくらいでしょう？」

「何言ってるんですか。私は貴方くらいの子供が居てもおかしくないくらいの年ですよ」そう言っ、グリムはハッと鼻で笑った。  
ここにはそういう奴が多い。外見と実年齢が噛み合っていないのだ。不気味だとも思いつつも、僕はそれについて何も言わなかった。

「それに、仕事も忙しいですしね」

「いつもお茶飲んでるだけなの？」

「馬鹿言わないでください。たまたま貴方が来るときに飲んでるだけですよ。それでも毎夜、時計に追われる身なんです」

「ふーん」

後で知ったが、確かにグリムは忙しい身だった。グリムはこの組織

『NYX』の幹部だったのだ。

それも、ただの幹部などでは無い。組織のリーダー、『夜ネズミ』の秘書で側近だ。

忙しくないわけがないはずなのに、この僕よりも小柄な医師は、僕が来るときにはシミだらけの白衣姿で、いつもお茶を飲んでいる。げっそりと顔色の悪いグリムの横顔を見ながら、僕は「少しやってみようかな」という気になった。

「おはよう」

その日、僕は廊下で彼を見つけた。僕は笑顔で彼の顔を見上げてあいさつしたのだけれど、彼はビクリと肩を揺らし、まるで化け物を間近で見ってしまったかのように僕を見下ろしてふるり体を震わせる。そして脱兎のごとく僕から逃げだした。

なんだあいつ。可笑しな奴だな。

それが最初の印象だった。

（みつけてしまった出会ってしまったどうしようどうしようどうしよう！）

### フェイト＋ページェント「浮雲と鴉（リンネ）」（3）

最初は本当に、ただの旅行のつもりだった。

両親がチケットをもらったが、店があるため行けないと言ったので、ありがたく頂戴したのだ。盆休みを利用して、数年前に上京した幼馴染を誘い、その奇妙なツアーに参加した。

実家は関西の商店街にある、しがない呉服屋である。小さいながら反物からのオーダーメイドも少ないながらしているし、最近手作りのモノブームに乗っかって、布や素材の販売がメインとなりつつある。

呉服屋というよりは、『呉服屋風の雑貨屋』と化してきているのが現状である。そんな店だ。

幼馴染の家は同じく商店街の礼服店で、我が家の分店舗の形を取り、学生服をメインとする。分店といっても父同士が旧知なので、その立場はほぼ対等と言っている。幼馴染は、その一人息子だった。

双方とづくに成人し、アイツは大学、私も勤務する身である。

最初は渋っていた彼も、そのツアー内容を聞くとボソリ「……おもしろそうだな」呟いて、すぐに頷いた。

文句はこうだ。

『奇跡の体験してみませんか？異次元でのリアルRPG体験ツアー！』

参加者は、私達幼馴染二人ともうひと組だけだった。

添乗員は一人。これが驚いたことに、栗色の髪をしたグラマーな外人美女である。

「アン・エイビーでえーす」しかし彼女は日本語がペラペラで……やや不安になるほど流暢に、ギャル風の口調ではしゃいでいる。しかしたった四人ならば、彼女で事足りるかもしれない。

もうひと組の客は、まだ若い男女二人だった。駅で最初に後ろ姿を見た時はカップルかとも思ったのだが、すぐにその考えは覆される。彼らは、とてもよく似た高校生の男女の双子だった。

「西藤 爛といいます」

ショートカットで、すらりとモデル体型の妹が丁寧にあいさつしてくれた。色素を抜いた髪もしっくりと似合っていて、黒のパンツに白いフリルのついたシャツと、ややフォーマルを着崩した格好をしている。

「小嶋 凜です」

兄も共通してモデル体型の、いわゆるイケメンというやつだった。が、何やら草食系の雰囲気漂っている。

パリッとした妹と同じ顔で、パーカーにダメージジーンズという、『タンスから適当に着てきました』というような恰好で、常に眠そうな顔で率先して荷物番をしていた。しかしそんな恰好も絵になるので、見目がいい奴は本当に得だ。

双子に共通しているのは始めて目にするどちらもビケイ人種だということと、やけに表情が乏しいぼうつとした奴だと言うこと。

外見については詳しく言うと、切れ長の目に白い肌、はつきりとした目鼻立ちなので、恐らく妹の平均以上の身長を見るに、外人の血が混じっているに違いない。

互いの名字が違うことには突っ込まなかったが、彼らは仲が良く、大変目の保養になる美しい対比の双子だった。

今思えば、後悔すべきなのか、それとも世の偶然に感謝すべきなのか理解に苦しむところである。

つまり言えるのは 私達に平穏が無くなったというその一点のみだった。



## フェイト＋ページェント「浮雲と鴉（リンネ）」（4）

本当に、最初はただの旅行のつもりだった。

姉代わりで一緒に育ってきた三つ上の幼馴染は、20も超えた現在ではあまり連絡も取らない関係だったが、それでも会えば昔の様に馬鹿な会話を楽しめることはできる。

互いのことはツーと言えばカーの仲であり、山と言えば川なのだ。

好みも癖も熟知しているし、恥ずかしい過去のアレコレさえ覚えている。長所も短所も特技も弱点も分かっているのだ。

だから、俺はすぐに分かった。これはヤツのこれからの過失であり、幼馴染として気付かなかった俺の落ち度である。

目の前には、俺たちの命を刈り取らんと迫る鋭い刃。

頭の中で鳴る警報は、その言葉を頭の中から掘り出した。

（明のヤツ、嵌められやがったな……！）

『NYX』という組織は、『違法異世界旅行者集団』と呼ばれている。

『違法異世界旅行者』、というのは、『勝手に異世界に渡った者』を取り締まるとある組織団体が付けた名称である。

それには事故も多く含まれ、故意に渡ったわけではない、偶然に愛された被害者達も少なくないので、一概に『違法』と言っても、彼

らに意思が感じられなければ罪に問われることは無い。

しかし『違法異世界旅行者』に『集団』が付くと、それはもう立派な犯罪者集団となる。

故意に人を集め、世界を渡り、世界の『筋書き』を変える。

『NYX』は、そんな『違法異世界旅行者集団』の中でも最も凶悪と言われる組織である。

「え？この前のスカウト、全員生き残ったの？」

僕は思わず声を大きくした。NYXは定期的に、適性のある一般人を『スカウト』しに行く。世界を渡ると言っても、その適性が無ければいけないのだ。そんな人物はとても稀有であり、多くは何も知らず各々の生活を謳歌している。

だから、違法異世界旅行者の多くは一般人なのだ。NYXはそんな、『事故』の可能性のある一般人を『スカウト』という名の、『拉致』をする。NYXが凶悪と言われる要因のごく一部の理由だ。

今回は、一つの世界に一人二人が相場である彼らがなんと四人も釣れたと言うので、僕は驚いたものだ。

普通、一つの世界にそんなに居ない。しかし『スカウト』には、『選抜』の意味もあるので、そのほとんどは落とされるだろう。

何せ、『スカウト』はまず未知の世界に、候補者を落とすことから始まるのだ。

そう、思っていたのに。

「それがねえ？四人のうちの二人がさあ、元違法異世界旅行者だったのお！」

「・・・何それ。もうすでに『異世界』経験者だったってこと？二人も？」

「双子の兄妹なのよお。し・か・も！能力持ちよ。有望な新人じゃんかあ、アタシも目の前がキラキラ

く、って感じ？」

担当のアン・エイビーという女が言う。彼女は実動員の一人で、これでも戦闘に特化したこの世界でのエリートだ。

口元にほくろのある、グラマーな妙齡の美女の姿をしているが、その実年齢はわからない。こんなでも、もしかしたら物凄いお婆さんかもしれない。

彼女はやけに僕に絡んでくるので、（色目を使っているのはいつもだ）こういった情報は比較的最新のものが手に入った。

「あとの二人は？そっちはただの一般人でしょ？」

「うん、そ。でも今、ネズミさんが能力の埋め込みしてる。戦場で生き残るくらいは根性はあるから、上手くいけば使えるデシヨ」

「ま、死ななきや体があれば何かしらは使えるけど……そんなに必要なものの？」

「組織に人間はいくらでも必要よオ。どんな使い方をするにしろ、ね？」

「……………」

僕はその言葉に何も言わなかった。

僕はまだ戦場に居る。ここもまだ、戦場だ。

命が無ければ。命さえあれば。それだけは手放してはならない。

『どんな使い方をされるいしろ』、僕等は生き残らなければならぬのだ。

この戦場では、『死』は逃げにならない。

逃げるならば、自らの足で逃げる事が出来なければ、絶対に抜け出せないのだ。

フェイト＋ページェント「浮雲と鴉（リンネ）」（4）（後書き）

ダイジェスト的・『DOMOUSEが出来るまで』。

主人公は、あくまでエルとリユーです。

ネズミ＝根積み様。

## フェイト＋ページェント「浮雲と鴉（リンネ）」（5）

僕はいつのまにかここに居て、今の『僕』になっていた。  
もしかしたら、僕もあの候補者たちの様にしてここに来たのかもしれない。

僕に前までは絶対に使えなかった『力』があるのも確かだし、それは確実にこのNYXに来たから使えるようになったのだ。

NYXが凶悪と言われる要因は三つある。

一つは、前述の通り、？一般人の拉致

？一般人への能力埋め込み

？人身売買

この三つである。

NYXのボスは、どうやるのか。何の能力も無い者に、『力』を与えることが出来る。僕は空間把握能力　つまりテレポートで、可も無く不可も無く、便利といえれば便利であるが、正直この世界では珍しくもなんともないことは分かっているので、『無いよりはまし』といった程度にしか使っていない。

これにも相性というものがあるので、当然何かしら変化は出るだろう。ミミズに目玉を付けるようなものである。

ヘタすれば、それによって死ぬこともある。プラスになるかマイナスになるかは、個々による。

しかしそれによって駄目になっても、ゴミでも宝になるという世界

はあるもので、NYXは人身売買も行っているのである。

言っておくが、逃げたいのは僕ではない。あいつだ。

僕はあの真っ黒い彼との一方的な逢瀬は続けていたが、どうも彼は全てのことを拒絶しているように見える。そして拒絶しきれずに、半ばあきらめて流されている、といったところだろうか。

いつから彼がここにいるのかは知らないが、畑が合わないのだろう。彼はきつと、『普通』の人間なのだ。本当に一般人なのだ。

『普通』の子供なのだ……。

「グリム、僕初めてだよ。あんなヤツ」

「言っておきますが、彼は『普通』などではありませんよ」

相変わらず、酷い顔色をして惘然とグリムは言った。「どこを見て、彼を普通だなんて言うんですか」

「あいつは怖がって嫌がってる。この世界には似合わないよ。持つべきは剣じゃなくて、せめて包丁、もしくは縫い針程度。それすら怖いとを感じるような、そんな奴だろう？」

「語弊があります。それなら、彼はこの世界で最も『普通じゃない』人間ですよ」

続けてグリムは言う。

「いいえ、彼は最もここに居るべき人間なのです。目的のためなら、彼は包丁でも縫い針でも人を刺し殺すでしょう。彼が普通だとしたら、彼はとくに自ら命を絶つか、それとも狂うか、じゃなければ」

グリムはふうつと宙を見つめ、言葉を詰まらせた。適当に束ねている後ろ髪が生えた頭が、ゆーらゆーらと揺れる。

「……はあ……」

グリムは溜息をつき、今度はうつむいて首を振った。

「……じゃなければ彼は、きっと貴方を殺している」

寝起きの様な、疲れ切った擦れた小さな声だった。

僕がグリムの言葉の意味を知るのはその二年後、N Y Xを抜けて、一年半後のことだった。

僕等の世界は、知らずうちに繰り返していたのである。

## フェイト＋ページェント「浮雲と鴉（リンネ）」（語り部会議）

彼は決して、自分の名前を言わなかった。

『彼』は、細部までこの建物のことを覚えている。

どこに何があるか、この形の染みがある壁はどこか、誰がどこにいるか……。

けれど、そこが、何をするとところかどうかは知らなかった。知りたくも無かった。

NYXという組織の建物は、まるで金持ちの屋敷のようである。しかも、ずいぶんな偏屈で欲張りな金持ちだ。

部屋数は100を軽く超え、敷地の規模など彼は考えたくも無い。途方も無いほどだ、というのは分かっていたが、彼はこの建物を外から見たことなど無かった。きっと誰も、ここを『外』から見ることとはしていないし、出来ないだろう。

永遠続くのは壁と扉と照明である。部屋は一つ一つ趣が変わり、和室も洋室も研究室も冷蔵庫も地下にある様々な部屋も、唯一つとして同じ部屋は無い。

しかし廊下は一貫して、薄い若草色の壁に白い星の浮かぶ灰色の石の床で、照明はいつも淡い薄橙の光を灯していた。

彼にとつて、ここは物語の序章である。この屋敷こそが、全てが始まる場所だった。

始まりはいつも、とある人物に出会ってしまうことから始まる。

それは場面によっては、食堂の前、またはとある人物の研究室前、書庫前、または……

『エル』は、彼の知る限り良く笑う少年だった。

それがどんな笑顔であろうとも、自分に向けられる感情がどういふものであっても、今はただの同情であっても、彼は自分にはいつも笑って話しかけたのである。



「君が考えるのは、いつもあの子のことだね。エルだっけ」  
彼の目の前の、簾のように前髪が垂れた陰鬱そうな容姿の幼児が言った。「もう諦めたらいいのにサ。ボクと違って、君はそれなりに幸せになれるだろう？」

「……」

彼は口を閉ざし、机の上の赤いカップの中身を見つめていた。二人が向かい合うテーブルの間には、双方を視界に入れるあの医者が、筆記用具を片手に会話を綴っている。研究室は薄暗く、灰色の壁に廊下と同じ石の床が敷いてあった。天井には、飾りつけのない白い電灯が灯りを提供している。  
幼児の前にあるカップにあるのはすでに残り少ないミルクであるが、彼と医者のカップの紅茶は、満たされたまますっかり温くなっていた。幼児はぐいっとミルクを飲みほし置くと、短い腕を伸ばして彼を指さした。

「結果より経過だよ。少年は壮志を抱け！そうだろう？違うかい？  
グリム」

研究対象に話しかけられ、グリムは一度、筆をとめる。

「……」

「何かいいなよ」

「……」彼もまた、黙っていた。

グリムはそんな様子の彼を見て、筆記用具をテーブルの上に纏めて置くと、口を開く。

「それは無責任な大人の意見ですよ」

「ボクは無責任じゃないよ。ちゃんと願いは叶えるからね」

「それは屁理屈というものですよ、魔法使い」

「魔法使いは約束は守るさ。ボクがここに居たくないのは、その約束が守れなくなる可能性があるからだ。ほらグリム、だからここから出しておくれよ。哀れだと思わない？ボクも、この子もサ」

「貴方が話すべきは、目の前の彼ですよ」

「ううん、今は君がボクの眼の前にいる人物だ。だってボクは彼じゃなくてグリムを見てるんだし  
あのね、ボク全面的に子供の味方なんだ。だって魔法使いだもの」

ちらつと、魔法使いは彼を見る。

「……」

「ボクは子供のために生まれ、願いをかなえるんだ。それがボクなの。ボクの存在意義なワケ。もしこの先、この彼が筋書き通りのバットエンドをしたとして、それでどうする？どうも変わらないさ。世界は回る。けど彼はまた同じことを繰り返すだろう？終わりになんて、根積みの野郎しか知らないのにさ」

「そうですね。けれど、貴方が居る限りも彼は繰り返すんですが？」

「そう彼も、君もまた繰り返す。ボクがヤツの願いを叶える限り、永遠ループループループ。生き神様が満足するまで、語り部さん達もループループループ。語り部さん達は、それに乗っかって物語の筋書きを変える。根積みは満足しない。ループループループループがエンドレス」

魔法使いはくーるくーると左手の人差し指で空に円を描いた。『彼はまたその台詞にうつむき、両手をしびれるほど握り締める。』

「……でも、」この実験が始まって三月。始めて彼が口にした言葉に、グリムは筆記用具を手にとった。

「でも俺は……あいつが俺を、俺のせいで、死んで行くのを……」

「それでどうするの？生き残るの？ハッ、ボクはね、もう君を助けることなんてできないよ。君なんてね」

「……でも俺は」

「君って『でも』ばーっかだ！そればかり。ボクは子供は好きだけど、子供の皮被った大人が一番嫌いだよ。何度死ぬの？彼のために死んで、彼もまた死んで、またやり直すんだ。諦めが悪いよ。結果より経過！諦めてそれを楽しめよ」

「……」

「何度突き放してやったって、アイツは君を見つけるんだ。これは運命だろう？ちっぽけなその幸福を喜ばないで、何で君は自分から地獄に突っ込んでいくのさ！」

「……はあ……」すっかり身に付いた溜息を吐いて、グリムは筆記用具を置いた。

紙の上には、いつも通りの魔法使いのおしゃべりだけ。最後に『変化なし』の言葉と共に添えられていた。

イレギュラー達の会談は、語り部の一人の叫びで終焉を迎える。

「それが運命なら俺は何度だって死んでやる！エルが俺のために死ぬなら俺が筋書きを変えてやる！」

筆を置いたグリムという名前の医者、一人の女として彼らをただ、

哀れに想ったのだった。

## フェイト+ページェント「浮雲と鴉（リンネ）」（語り部会議）（後書き）

フェイト（Fate）

- ・（原義）運命を意味する英語
- ・ the Fates - モイライ（運命の三女神）

ページェント（pageant）

- ・ 正しくは「パジェント」。日本では誤った発音で流布した。
- ・ 歴史的な場面を舞台で見せる野外劇のこと。あるいは祝祭日などに行われる仮装行列や、華麗・大規模なショーなどのこと。
- ・ 特にクリスマス聖誕劇のことを言う。これは、新約聖書の福音書に記された、イエス・キリストの誕生にまつわる様々なエピソードを象徴的な形式の劇にまとめたもので、今でもキリスト教系の幼稚園や学校などで行われている。
- ・ パジェントとは「ページを開く」という意味の言葉から来ており、歴史的な出来事の場面を本のページをめくるように次々と表現し、造っていくという意味である。

フェイト＋ページェント「浮雲と鴉（リンネ）」（6）

「こんにちは！」

僕が声をかけると、例のごとく彼はハツと下を向いていた顔を上げてこちらを見た。

「ねえねえねえ、どこ行くの？」

いつもならば、ここで彼はすっと目をそらし、逃げだすのであるが、今日は少し勝手が違っていた。彼は視線を下へ逸らしたのはいつも道理だったが、何故だかバツが悪そうな顔をしていて、眉根を寄せたしかめっ面のまま少しだけこっちを見て小さく「こんにちは」と言っただ。

彼は背が高いものだから、下をむいたって僕にはその顔が見える。けれど彼はいつだって視線を合せなかった。自分がそっちを見なければ相手にも見えないとも思っているのか、頑なにあらぬ方向を向いて、あるいは背を向けて囁くように喋る。

大概、今までそれは事務的な業務連絡で、近頃僕に回ってくるようになった仕事だった。

僕は驚き、言葉も無い。

彼はそれをどう思ったのか、今までの様にさっと身をひるがえし廊下の向こうに走り出した。

慌てて僕は、彼の手をつかむ。ひくつ、と、彼が変な声を出した。

「ね、ねえ。僕、エルっていうんだ。君の名前は？」

「……リユー」

相変わらず下を向いて、囁くような声だった。

僕が彼をそう思ったのには、二つの根拠がある。

一つは、僕らがやっているこの所業に怯えているように見えること。

もう一つは、ただの僕の感である。

僕だって軍人で、軍に居て、けれど同世代との交流が無かったわけじゃない。そもそも僕の仕事は……というよりも、僕のこの能力は、『普通』を知らなきゃ化けられない。

僕の諜報能力はどちらかといえば『技術』だし、それなりの努力と研究で培ったものだったから。僕は『人間観察』がとても得意だ。僕は軍人でなければ、もしかしたら芝居か、それに準ずる何かの職業に就いていたかもしれない。

（笑わせるのは得意なつもりだったけど）

僕はリユーの腕を引き、とっておきの場所に招待したのだ。そこは基本的に誰も来ないし、来ることもできない。いや、リーダーなんかは違うだろうけれど。

ここは、何故だか他よりもずっと鮮やかに僕の眼に映った。

黄緑色の壁に、蒼い絨毯の部屋だ。何故か白い桐の空の箱が奥に積まれており、（数えてみれば72箱あった）長方形の以外に大きなそれは、部屋の半分ほどを埋めている。窓は無いのに、紅色のカーテンがかかっている。

ここは僕の休憩場所だった。人は来ないし、来た気配も無い。ついでに、ここでサボって見つかったことも無い。

灯りが微妙に薄暗いのが難点だけど、だいたい綺麗だし、たまに僕も掃除しているので居心地はいい。

けれど彼はまったく喋らず、それどころか椅子代わりの箱に座ったまま身じろぎひとつしない。先程のあれこれは夢だったのだろうか、と思うほどの置物っぷりだった。

「……」

「喋るの苦手？」

「……そうでもない」

嘘だ。そんなことないくせに。（すぐばれる嘘について……）

「君以外だと、話せる」



「はあ……それは……」  
不覚。僕の鉄壁の笑顔がひきつった。

## 学パロ設定（途中）

ただのとある青春あるあるネタになるかもしれない。

周しゅう 晴光せいこう

（高一：15歳：バスケット部）

運動部代表。

ムードメーカー。

ファン

（中三：14歳：文芸部）

文化部代表

みんなの妹。

東：クロックフォード エリカ（あずま：くろつくふおーど えり

か  
)

(高一：16歳：剣道部)

副会長

両親別姓。

ニル

(高三：17歳：放送部)

会計

童顔。

ビス ケイリスク

(高三：19歳：帰宅部)

生徒会長

持病で留年。

ステイール ケイリスク

（執行部顧問：まだ二十代：会長のお兄さん）  
体弱いのに、生徒に交じってハッスルする。

エル

（高二：演劇部：17歳）  
演劇部エース。

リユ一

（高二：保健室登校：16歳）  
保健室登校。

東 シオン

（エリカ父：喫茶店店長：36歳）  
ヘタレ。

アイリーン・クロックフォード

（エリカ母：雑貨屋店長：37歳）  
姉さん女房。

ダイヤモンド・ケイリスク

（ケイリスク家父：国語教師：36歳）  
外国人国語教師（古典）。ケイリスク兄弟父。

グリム

（理科教師：年齢不詳）  
マッドなサイエンティスト。  
弟と旦那が居る。

アン・エイビー

(家庭科教師：2?)

えろ系教師。ぼいんぼいんのふりふりロリ系。

学パ口設定（途中）（後書き）

ただの青春あるあるネタになるかもしれない。

学パロ@とある男子高校生達の会話（シモネタ注意）

シモい。男子高校生猥談レベル中くらい。

あの・・・さくらんぼのさ、ヘタを口の中で結ぶと  
ってあ  
るじゃん？

ああ、あの、キスが上手いつてやつ。

それ、キスじゃないよ。

え？



キスはデマ。っていうかフェイク？

・・・ああ、それ・・・。

ああ~~~~・・・

えっ何！？僕だけ知らないの！？キスじゃないの？

え~~~~！知らないの~~~~！？

うぎっ！

・・・女子陣、もうすぐ帰ってきますよ。

えっと……（ここそこそ）

え………？………なっ、なるほど！

いやあ、アレだよな。そりゃそうだよな！舌使いならキスよりそっ  
ちだよな！

はあ〜．．．なるほど。

．．．．．。

小学生でも知ってる話だもんね。

真実は酷だよなあ。

甘酸っぱい思い出の小ネタが、一気に生々しくなるよね。

っていうかアレ、苦しいって言うけど、どんくさい？

そりゃ、喉を塞がれるんだから．．．

ばっか！それじゃ、何のために人間には鼻の穴が二つ付いてんだよ！！

周くん……鼻の穴は喉に繋がってるんですよ……

アホな男子高校生達。

知識欲に負けたニルと、知識をひけらかしたい晴光と、保身に回ったビスと、10代に混じってハッスルするお兄さん。

## ガールズ・トーク

美醜なんて、しょせん運なのよ。親が金持ちか貧乏かってくらいの運だわ。

その世界・時代に好まれる容姿の遺伝子を親が持つてて、それをうまく受け継いだ、ってことなのよ。

「肌がきれい」っていうことは肌荒れしないでいいアレルギーがない強い皮膚細胞を持つてるってことで、「歯並びがキレイ」は、小さい頃に親が頑張ってくれたって証し、「スタイルが良い」は規則正しい生活を送ってるってこと。「表情が明るい」のはその人の性格がいいから。

「持つてる」か、「持つてないか」、の違いよね。財産と同じ。あと、「持つてる」ってことは、管理しなきゃいけないってことだから、おざなりにするのも、限界まで磨き上げるのも、個々の勝手ね。

私は自分の容姿が良いって自覚はあるけど、それは運と自分の努力の結果でしょう？私はこの容姿が好まれるって自覚はあって、容姿の美醜はこの仕事に少なからず影響するって思ったから「管理」してるだけなのよ。

なんでも管理するには、お金と手間と時間が少なからずかかるも

のよ。

でもチリも積もれば山となるっていうように、根本は努力と根性、継続でしょう？

私は生まれも特殊だし、この外見を「管理」する上でメリットだけがあるわけじゃないわ。デメリットだって多いかも。でも、土台は親からもらったもので、積み上げてきたのは確かに自分なのよ。

ファンちゃんは綺麗よ。十分可愛いわ。これからもっと綺麗になる。

私はきつと、今のまんま。これ以上はいらないし欲しくない。

でもファンちゃんは恋をしてて、アイツのために「綺麗になりたい」って思ってる。

思うだけで違うの。分かるでしょう？

アイツは馬鹿だから、すぐには気付かないわ。図体ばかりデカイから、すぐ隣りのファンちゃんが見えないのよ。

ファンちゃんがもつときれいになって、眩しくなったら、嫌がもうにも気付く時が来るわ。頭の中までおめでたい色してるんだから、その時なつてようやく慌てだすんでしょうね。目に浮かぶわよ。

私？そうね。私は恋はまだいいんじゃないの。

仕事楽しいし、やりたいことだってあるもの。っていつても、  
相手がいないだけなんだけど。

もし恋をするのなら、私に何かを「やりたい」って思わせるよう  
な、そんな人がいいわね。

## ガールズ・トーク（後書き）

エリカ嬢と、みんなの妹分フアンちゃんの恋話。

エリカ流『美の哲学』。



## 悲劇のマフラー（前書き）

虹<sup>コウ</sup>

チビで童顔でつるぺた15歳。妄想族の最先端を滑空する。喫茶バイト通称『バイトちゃん』。

クリス（クリスチャン）

金髪碧眼そばかすの毒舌シヨタ系12歳。人間って心底馬鹿だと思ってる。

エル（エルディア）

修道女姿の女装少年。16歳。女装は趣味と実益と理想の体現を兼ね備えた職業病、らしい。

## 悲劇のマフラー

虹「兵庫県の某忍者の学校アニメより、とある戦争孤児の少年が巻くマフラーには、『母親の形見』という説がありました」

クリス「は？」

虹「後に元作者によって、あのマフラーはただのキャラ付けのためのものだと判明したのです」

クリス「……で？」

虹「某イナズマサッカーアニメでは、雪国の二重人格の少年が登場します。彼のマフラーは数年前に亡くなった双子の弟の形見であり、

自分の人格の象徴だったわけですよ」

クリス「それが何さ」

虹「首に巻くという行為によって、マフラーと言う防寒アイテムは何かしらの意味を連想する場合が多々あるのです」

クリス「まあね。首は急所だから」

虹「ちなみに前述の吹雪少年は、南国沖縄に訪問した際もそのマフラーを外さなかったそうよ。・・・ウチにも年がら年中マフラー巻いてる人いたよね？」

クリス「エルのこと？」

虹「彼のマフラー、目測でだいたい二メートル半あるんだよ」

クリス「長ッ！あの白いのそんなに長いの！？」

虹「歩いたら絶対パタパタするよね。邪魔じゃね？って思うんだけど」

クリス「布の量がんばらないよ。ていうか何？あの女装男そんなにキャラ付けに必死なの？」

虹「そういう発言は身を滅ぼすぜクリスちゃん」

クリス「クリスちゃん言うなチビメタ女。…………あいつって武器、暗器使いじゃなかったっけ？」

虹「修道女服と言い、邪魔だよ絶対」

クリス「ていうかアレ修道女服？もう原型留めてないじゃん」

虹「袖とか改造しまくってますから。まあ可愛いからオールオッケ  
ー」

クリス「うわ、あんなのも範囲内？アンタ本当節操無いね」

虹「人をビッチみたいに言わないでください。俺は似あってりや  
いいじゃんと言ったんです」

エル「だよね！」

クリス「うわ。出た」

虹「やほーエルディア嬢」

エル「こんにちはバイトちゃん」

クリス「ちょうどいいや、そのマフラー何なの？用途は？」

エル「え？お洒落」

クリス「……………」

虹「俺は予想の範囲内ですよ！」

エル「あと、体系隠しかなあ」

クリス「体系隠し？」

エル「うーん、性別を偽るわけだから、一番大変なのが骨格なんだよね」

虹「ほう」

エル「首と肩と、あとは腰の位置。手の感じとかもそうなんだけど、僕はまあ細いしプロだから色々対処してるんだ。マフラーはその一つね」

虹「色々あるんすね」

エル「マフラーの効果的な用途として、縦のラインを強調するっていういわゆる足長効果があるんだけど、女装と男装とじゃまず女装の方が足が長く見えるんだ。

それは手足が長いほうが、スタイル良く見えるっていうのがあるんだけど、メンズとレディースのジーンズだと、メンズの方がサイズが大きいのに女性が履こうとするときつくて入らない場合が多い。

これは、女性の方が脂肪がついてふっくらしてるからなんだよね。男より一回り太いわけだから、それをどう綺麗に長く見せるかって言うのに特化してるんだ。

で、女装する場合は僕はその脂肪がないわけだから」

クリス「長い長い長い！」

エル「え？マフラーが？」

クリス「違う！！！」

虹「ようするに、服の改造もマフラーも女装アイテムってわけですね」

エル「あと制服って言うのはいいね」

クリス「えっ、フェチ的な意味で？」

エル「いや、パツと見女子制服だと、先入観が生まれやすい。長い髪でミニスカート履いてる子は女の子らしく見えるでしょ」



虹「深いっすね……！」

クリス（……そうか？）

エル「僕、プロだから！」

虹「プロフェッショナルっすね！」

エル「まあ、普通に暗器も忍ばせてるけどね。これだけ布面積あったらいっぱい隠せるし」

クリス「マジで職業病なのかよ」

## 悲劇のマフラー（後書き）

忍玉より、きり丸の襟巻形見説は有名です。尼子先生が「ただのキヤラ付けです」って言ったらしいよ。  
きり丸が戦争孤児って聞いた時はウワツと思った。妙に深いから忍玉って人気出るんだね。

あと、吹雪少年があのマフラーを洗濯してるところを想像すると、無性に笑えるのは俺だけですか。

忍玉とイナイレ知らない人はごめんね。エルは女装だけじゃなく、変装・諜報全般のプロフェッションナル。

## 花冠（エリカ）

私には生きる上で障害があった。

両親から遺伝された、先天的な障害である。

母は言う。「この世は一つではない」

私の障害とは、無意識にどこかへ「飛ばされる」ものだだった。

煤きれた部屋が高原に変わり、低い天井が青空へ      これは一つの例だ。

荒れ果てた灰色の大地だったり、滅びた遺跡だったり、霧深い野山だったり。

そこは必ず私一人。じっと待てば帰ることが出来るから、じっと待つのだ。ひとりきりで。

私は慣れたもので、母に言われるでもなく学んで、その場に座り込んでいた。

曇り空の、荒廃した土地だった。瓦礫をよくよく見れば、確かな文化がうかがえる。

地面はあちこちに掘り返されたようなえぐれた跡があったが、すでにうつすらとヒースが芽吹いていた。

顔も見なかったのない父も、昔は母も、こうやってどこかへ『飛ばされ』ていたという。

母は父に会って、力を亡くしたんだと言った。その代り、父は今まで無かったそれで『飛ばされる』ようになった。

今、私たちの傍に彼が居ないのはそのため、曾祖父が言う『逃げたのだ』という言葉は信じてはいない。

私は父によく似ているから、誰も彼も私を見て思い出したように父の話をしてくれる。

それこそが真実だと、母が信じているから私もそれにならうのだ。馬鹿な考えに負けるものか。

私と母は、信じたい方を選んで信じている。

私ひとりの世界に、人は、生き物は、存在しない。

自分にとって、世界は一つではなかった。

異世界と呼ばれるものは、ずいぶんと身近だ。

そこでは二次元も三次元もひっくり返されるし、同じ人間が同じ人生を歩んでいるとは限らない。

この地では、少し前に紛争が起こっていた。

俺が訪れる世界は、なぜかどこも人が栄える場所であつた。

彼女と出会ったのも人が大勢いる商店街だったし、先程だつていきなり城の騎士達の寝所の様な場所に出てしまつて慌てて逃げてきたのだ。

俺は今年で17になる。最初もわずらわしいばかりだったこの力も、こう場数を踏むとなんだか「そう悪いものでもないのかも」と思うようになつてきた。

まだ若いのに、思考がずいぶんと爺臭い。

もともと小心者の俺だから、逃げることだけが特化した。諦めなければやっていられなかった。

俺はどうせ世界に嫌われている。

時間がくればまた飛ばされるのだ。諦めて、観光気分で楽しまなければやっていられなかった。

もし危なければ逃げて、生き延びて、そして、帰るのだ。

（どうしよう。ここがどこか分からない）

何せ、最初に騎士たちの寝所に出てしまったので、俺は必死だった。寝所ということなので、つまり人が寝て休んでいる場所だ。そこに寝ている人と言うのは、つまり騎士達で、そこに出た俺は当然歓迎されなかった。

騎士っていうものはつまり                      武器を持ってお国のために戦う人たちであった。

行った世界の数なんて覚えていない。けれども、騎士というのには複数知っている。

共通するのは、国家公務員のように税金からお給料が出ていること、平和でない国の騎士は任務と訓練で忙しいこと、基本的には階級制度で、下っ端は出稼ぎの住み込みが多いこと、彼らは戦う人たちなので、武器が命だ。戦いの前は緊張感を保つために、武器を抱いて寝る者もいる。

どうやらこの世界のこの国は、思いっきり紛争の真ただ中だったらしい。

ただでさえ毎日アドレナリンを出しまくって、緊迫状態で休んでいた騎士の腹を思いつきり踏んでしまった俺は、すぐさま武器を持った屈強な男達に囲まれた。

さすが国の宝達、流れるような無駄のない動きであった。

自他共に認める小心者の俺はまさかの急展開にぎゅうつと心臓が絞られつつも、いつもの判断で窓から逃げた。そこは5階だった。地面は騎士さん達の靴で固められていたので、少し痛かった。着地に失敗していたら死んでいたと思う。

とりあえず、逃げに逃げ、（いきなりパッパー！と、警戒音らしきものが鳴り響いたのには焦った）城の塀に穴をあけ、路地裏を抜けて国境付近場所まで来た。

目の前は、ヒースがちよろちよろ生える荒野、荒野、荒野……。

空は青い。ピーひよろろろ……と、何か黒い鳥が舞っている。町を囲む塀は、なぜかすっかり見えなくなってしまった。無駄な経験値がピコーンとひとつ、報告をしてくれる。

（ここ、戦場跡じゃん……）

恐ろしいことに、戦場跡ということは人が争い死んだ場所ということになる。

戦争が悪いとは言わない。人間、争うことも必要だ。生存本能だ。

それこそ人の野生である。

人の争いはすべて子供のおもちやの取り合いから始まっているとは、どこかの誰かの言葉である。

ただ大切なのは、それで人が死んだということだ。そしてその場所に、俺が立っているという事実だ。

こんな、ただボコボコになっただけの地面を見て、『戦場跡だ』とわかってしまった。

どんどん自分は普通ではなくなっている。ああ恐ろしい。普通の17歳は、地面の跡を見て使用武器はわからない。

（あつ、あれ大砲の痕かなあ・・・）とか、ありえない。

そうこうしていると空がうつすらと紫色になってきて、（まずい）慌てて俺は行動を開始した。

野宿を夜になってからしたのでは遅すぎる。とりあえず火を焚かないと、野生の獣が獲物を求めてやってくるのだ。（しかしなぜだろう・・・野生の獣なら追い返せる気がするのは）いやいやいや・・・

火を焚く点で、注意すべき点がひとつある。

それは、火を恐れない生き物だっているということだ。

それつまり、人間という生き物である。



「うあああああああつ！」

「待てー！」

よく考えりゃわかること。火を焚けば煙が出て、消したって跡が残る。

古代日本だけではあらず、どこの文化でも、『のろし』という、煙を用いた情報伝達手段があった。

立ち上る煙は遠くまで見える。だって空は繋がっているんだもの！

こんな真つ暗な中で、ただ当てもなく追いかけまわされる。恐ろしいことだ。

俺は小心者なので、こういう状況にいまだに慣れない。いつもパニックになって、必死で無い脳みそをひねり出し、みそっかすの経験に助言を求める。

着の身着のまま、武器は素手と、サバイバルするための携帯用折り畳みナイフ。

刃物は包丁として以外で使いたくない。血を吸えば、それはもう武器だ。武器は俺は持ちたくない。獣は別だ、どうせ胃袋に入る。

いつも通り、ヒィヒィ言いながら逃げ回って息を殺し、身を隠しつつ、頭を冷やしてじっと待つ。

今は夜。あいつらが持つ明かりが場所を知らせるので、夜目がきく俺は闇に紛れればいい。

都合のいいことに、俺の髪色は黒である。瞳だって、少し青っぽい紺色だ。暗いと真黒に見える程度なので十分。服もそう目立つものは着ていない。

逃げ回れば、いつしか声は遠ざかり、遺跡の様な場所に出た。瓦礫を撫で、凹凸を見ればすぐわかる。ここは城の痕だ。

あちらの騎士達の城か、それとも負けた相手の城なのか。どちらにしろ、ここは戦場の中心だったのだ。

（ああ、やなところ来ちゃったなあ）

そこはどんよりとした曇り空で、今にも大粒の雨が落ちてきそうだった。

風は冷たい。ごろごろと、空のうなり声が遠くから聞こえた。

雨が来ると嫌だ。私は立ち上がり、瓦礫の中を見渡した。濡れて帰ると、母が心配する。

いつもの仏頂面のまま、黙々とタオルを押し当てるあの顔はあまり見たいものではなかった。

どこか・・・どこか、屋根のある場所を探さなくては。

そうこうしているうちに、空がひと際大きく唸った。

身を縮め、早く早くと早足で歩きまわる。ああ、あそこがいい。大きな柱が二つ、折り重なって出来た影だった。

柱のヒビが気になるものの、そういまでは倒れないだろう。

私はゆつくりとスカートの裾を汚さないように腰を下ろし、影の中で身をよじった。

ごろごろごろ・・・

石がぶつかり、転がるような音は、空の音だと思ったのだ。

「危ない！」

声と共に腕を強く引かれ、私の体は弾丸のように飛び出す。暗い空がまた見えて、ぐるりと一回転、何かに受け止められて止まった。

「危ないだろ！あんなの崩れるに決まってるじゃないか！」

足をぶらぶらさえたままわけもわからず罵倒され、私は身をすくめた。ちらりと見れば、先ほどのあの柱が、折れて倒れている。あの、

ヒビの部分から折れたのだ。

理解すれば足の先から震えがきた。

私の顔を覗き込んだ誰かは、うつむいた拍子にポロっと思わずこぼれた私の滴を見て、ギョツとした様に肩を跳ねあげた。

「大丈夫だよ」

「怖かったね」

うつむく私の頭をおずおずと撫でる。靴と、しゃがんだ足だけが私に見えた。

「俺、シオンっていうんだ……って、言葉通じるのかなあ」

彼は私の顔を覗き込んで言った。

「……私は、エリカよ」

答えると、シオンは嬉しそうに笑う。

「東、エリカっていうの」

ここでなぜか、私は母の姓ではなく、戸籍にも記されていない父の姓を名乗ったのだ。



## 花冠（エリカ）（後書き）

奇跡の出会い。未来の娘に出会ったシオン少年（17歳）と、若かりし頃の父に出会ったエリカ嬢（7歳）。

### イメージソング『花冠』

花をヒース（エリカ）に例えてみた。

エリカの花言葉は、

「孤独」「謙遜」「休息」「心地よい言葉」「博愛」

（紫）「閑静」

（白）「幸せな愛を」

ヒースは荒廃した土地に生える、背丈の低い草。原産地はアフリカやヨーロッパ地中海地方。

ちなみにエリカはイギリス出身。

世の中似てる人はほにゃらら（前書き）

ggggをどうにかしたい今日この頃。

世の中似てる人はほにゃらら

もし、『主人公ズがジャンプ愛読してたら。』

「エリカって、お妙さんみたいだよ……リアル猟奇的な彼女」

「貴方といつ恋人になったのよ。私としては雨宮さんの方が近いと思うけど」

「自分で言うか！？……ていうかどっちにしろDSじゃん……」

「どちらかといえば女王様じゃない？」

「どっつ違っんですか？」



「でもツンデレじゃないよな……ツンばかりだもの。デレがないもの」

「えっ、デレがないと女王様なの？」

「話をちゃんと聞きなさいよ……」

「でもエリカちゃんをお妙ちゃんにしちゃうと、いつも蹴られてる晴光君はゴリラになっちゃうよ？」

「それは嫌だ！」

ファン「晴光君はナルトじゃない？ほら、熱血系だし……」

「どちらかといえば、不器用なボッスンでしょ」

「ボッスンが器用じゃなくなったら何も残らなくなる！？ただのスツトコドツコイじゃない!？」

「……すつとどつこい……」

「ちよつ、隊長！復唱するのやめて!」

「はいはい俺は!」

「銀さん」

「えー!やだあ」

「女子高生みたいな声出さないでくださいよ気持ち悪い」

「天パで白髪。ほら、ぴったりじゃないすか」

「……ビスも同じだし」

「隊長真面目ですもの」

「ちくしょー親父の遺伝子バカヤロー！せめて同じ白髪なら白蘭にしてー！」

「あーはいはい」

「隊長はー？」

「…………アレン？」

「…………博愛主義ではないですよ」

「じゃあサイとか…………」

「ウチの子空気読めますよ」

「…………敬語つながりで黒子！」

「…………うん…………」

「SQだけど、外見的には泣かないラグ」

「あーーーー！それがあつた！」

「ニル君は？」

「あつ忘れてた」

「酷い！」

「アンタなんかどうせここじゃなかったら、眼鏡かジミィポジションなのよ」

「せつ、せめてウィングさんに！」

「……だれだっけ？」

「そんな微妙な人にしないで！」

「何言ってるの！？ウィングさんはゴンとキルアの第一の師匠だぜ」

「あー……あの天空闘技場の黒髪眼鏡……」

「第一師匠は門番のゼブロさんでしょう」

「あ、そうか」

[illegible]

ファンちゃんはヒナタでしょう。

お妙さん・銀ちゃん・ジミー（山崎退）・眼鏡（志村新八）・ゴリ  
ラ（近藤勲）

・ ・ ・ ・ 銀魂

雨宮さん（眼鏡美脚美人）

・ ・ ・ ・ サイレン

ナルト・サイ（空気読めない人。なんか白い）

・ ・ ・ ・ NARUTO

ボッスン（集中力がすごい主人公）

・ ・ ・ ・ スケッチダンス

白蘭（未来編でのラスボス）

・ ・ ・ ・ リボーン

アレン（ジャンプに珍しい敬語キャラ主人公）

・ ・ ・ ・ Dグレ

黒子（影の薄い主人公）

・ ・ ・ ・ 黒子のバスケ

ラグ（泣き虫主人公）

・ ・ ・ ・ テガミバチ

ウィングさん（抜けてる眼鏡）・ゼブロさん（ムキムキのゾル家  
掃除夫）

・・・・H×H

その2・

白髪で天パで死んだ魚の様な無気力な目って、どこかで聞いたよう  
な紹介の仕方ですね。

でもビスは働くことについてすごく意欲的だからね。貧乏は貧乏だ  
けど楽しく生きてます！

お兄さん必死ですね・・・

白髪ってことだって、『銀髪です』とか言い訳しないで認めてるか  
らね。しょうがないよ、白髪だもの。



そうですね、白髪ですもんね……

ここじゃあそんなに珍しくないよ！ピンクや桃色の人だっているし！

ピンクも桃色も同じ色ですけどね。

そもそもビス、ぴっちぴちの19歳だし。これからだし。体に至ってはもっと若いし。

若いというより、幼いんですよ。

天パは父譲り！ケイリスク家の証し。

なんか切なくなってきたんですけど！？家族ネタやめてくださいよ  
なんか涙でそう！！

収まりのある天パです！天パっていうより癖っ毛？なんかクルクル  
っっていうよりウェービーな、こう、

おもいつくそ跳ねてんでしょうが。それは天パです。

ストレートパーマかければいいじゃないですか。

そんなお金がどこあんの・・・？

・・・。

（切ない！）

うちの子はマダオじゃありません！

まあそうですね。隊長は。

血糖値だって低いです！お菓子なんて最近久しぶりに職場の女の子にもらって食べました！

たかがチヨコ一個がですか。

チヨコの味なんて正直忘れかけてました！

そもそも甘党じゃないので……洋菓子よりせんべいとかの方が好きですね。

ジュースなんて飲ませてもらったこと無いから、お茶の方がいいよね。お酒は好きだけど。

渋い！あと切ない！

むしろ、血糖値低すぎて怒られるよねーあはははは

『真面目すぎて』『健康診断で』『怒られる』。あっほら、隊長もマダオに……

『貧血ですね。朝ご飯ちゃんと食べてますか？』って聞かれるんですけど、任務中はちよつと……

体調管理してくださいよ……

もう持病ですからね。仕方ないです。

『持病があっても大丈夫かしら』とか思いながら選んだ保険に入ってる。

何かのCMみたいですネ。

せめて保険金ぐらいおりてほしいという兄弟愛だよ。

もう、お兄さんが出来のいいお嫁さんを逆玉する方が良くないですか。

やだよ俺。まだ独身でいい。いやむしろ、独身が良い。

力説することっすか……

分かってます？白髪で天パで目……が死んでるかはわからないけど、マダオはお兄さんですよ。

大人げないことしてないで、ちゃんと仕事してくださいね。

そうですね！そうすれば双方負担が減りますもんね！

ということですが兄さん。これ……（書類そつと出し）

え……ちょっとびすうづううづうづうづう……！！！！！！

靈感アリ（第六部隊）

.....

とっ、とっ、とっ、とっ、とっ、

音がしました。

彼はそっと、居間から廊下を覗きました。

今、両親はいません。兄も学校なので、独りぼっちです。

しほはくすくす

とっ、とっ、とっ、とっ、とっ、

また音がします。

(足音だ)

彼はそう思い、小さく声をかけました。「…………おかあさん？」

…………っ、っ、っ、っ、っ、っ、っ、



近付いてくるわけでもなく、遠ざかるわけでもなく。

彼は首を傾げ、天井を仰ぎます。

（ああ、上か）

そう思ったとたん、彼はパチクリと目を瞬きました。

（・・・・・・上？）

彼の家は小さな集合住宅です。最近越してきた平屋の住宅で、二階などありません。

$\dots$ ,  $\Gamma\Gamma\Gamma\Gamma\Gamma\Gamma\Gamma\Gamma$ ,  $\Gamma\Gamma\Gamma\Gamma\Gamma\Gamma\Gamma\Gamma$ ,  $\Gamma\Gamma\Gamma\Gamma\Gamma\Gamma\Gamma\Gamma$

彼は幼心にゾツとし、バタバタと慌ただしく両親の部屋まで走って布団に潜りこみました。

目をつむって一秒、二秒・・・

頭の中で数えながら、じっと待ちます。

音はいつしか、聞こえなくなっていました。

「・・・ふう」

そつと布団の中で目を開き、静かな家に息を吐いて。

そして、そつと、布団をめくり、顔を出し



「五月蠅いわ」

にべも無く振られた声に、晴光は突っ込んでいた座布団から顔を出した。

情けなくも悲鳴を上げた顔は、半泣きの状態で固定されている。

「ここここええー……」

「晴光見てたら、なんか怖くなったよ」

ニルが苦笑いして言う。晴光はぎこちない仕草で、エリカの隣に座りなおした。

「あはは。昔は俺たち、よく見てたんだよねえ」

「そうですね」

ケイリスク兄弟は、してやったり顔で（ビスも無表情が心なしか）目配せした。

「でも、本当に怖かったです。思わず叫んじゃった」  
「でもファンちゃんの悲鳴は晴光で消えてたよね」  
「そうね。聞こえなかったわ」  
「お前ら怖くねえの？」

「……この中で、ユーレイ見える人」

「はい」

「私も」

「俺も」

「………たまたまに」

「まじでかよおおおおおおおお」

みえる人。

強い

ビス

ステイル

エリカ

ニル

ファン

晴光

弱い

晴光は、『靈感がない』というよりも、ただ単に鈍い。『見える』というより、第六感で『感じる』人。

なんとなーく、ここ居心地悪いなあ、という感じ。ファンちゃん同じく。

ニルは金縛りレベル。見えやしないけどなんか居る。ついでに身体に異常が出る。

ケイリスク兄弟・エリカは、ばっちり見えて感じてしちゃう人。ちなみに、ケイリスク父もばっちり見えます。

エリカはね、ホラ、魔女だし、ね。魔女通常スキルレベルです。



## オタクの会談（前書き）

：今回、大変気持ち悪い仕様となっております。タイトルで『あ、これ駄目』と思ったら、すぐに他のページへ避難してください。とりあえずオタク二人が語ってるだけです。

小嶋凛 こじまりん

（イケメン美大生・淡々とした王子様顔の元ヒッキー19歳。BL N L G L 常に雑食系）

虹 にじ

（喫茶店バイト・シモ系パロにハイテンション15歳。言動はR15、脳内は成人向け）

クリス

（犠牲者になっている少年・毒舌鬼畜言葉攻め系だが、虹が心底苦手。虹いわくツンデレ）

## オタクの会談

リン「所詮ね、本気出したら人なんでも出来るんだよ」

虹「まあねえ。やり過ぎて怒られるのも日常だけれども、一日24時間で100枚書きあげるとか・・・編集入れて三日とか・・・ジエバンニ乙的な・・・クオリティ没って感じでもね、根っこにあるもんは一緒なんだから」

リン「まあそこはさ、生温かく見守ってほしいよね。嫌なら見なきゃいいんだよ」

虹「邪なことは考えてないですもんね」

リン「いや、あれはある意味、邪な考えのもとに生まれたんだよ。

『これに反応してくれたら同士』みたいな、見えないどこかに居る軌跡の出会いに、少しの期待をね」

虹「見えない誰かが、世界の向こう側で笑ってくれたら、幸せなんですよ」

リン「そう。次元の向こう側だね。基本に戻るけど、所詮『本気の遊び』なんだよ」

虹「本気の『悪ふざけ』とも」

リン「そうそう。でもそれによって、死んでいたった人も数多星の数だけ」

虹「いつかは卒業しなきゃいけないんですよ……いつまでもB組に居られないんですよ……」

リン「……いい例えだ」

虹「いつまでも馬鹿ばっかしてるわけにはいかないんです。そんな未来の糧にならない、無益な所業……」

リン「みんなわかってるから、一時だけでも……と、全力で遊ぶんだよ」

虹「終わると分かっているから……ええ、そうです。だから辛くても苦しくても……」

リン「最期まで俺たち、あの地平線に向かって走ってるんだ……」

虹「ゴールというスタートは見えてるんです。そこに辿り着いたら、スタートしなきゃいけないんです」

リン「貴方は、さぞ有益な時間を過ごし、未来の糧を培っているのでしょうか！bat！俺たちの犠牲が、貴方にと

つての無駄な時間が、誰かの力になればいい！……そうだよ。ね。虹ちゃん」

虹「ええまさに……。それが真理です。それこそが『モエ』という心理の元」

リン「それが誰かを不快にさせようとも……。出来れば見ても見ぬふりスルースキルを磨くこと、心を広く持つことが、貴方に出来ることなのです！」

虹「しかし忘れてはなりません……。そんな中には、本気で怒ってあげない時もあるということ……」

リン「みんな子供なんだよ……。！人間、誰しも子供に戻る場所が必要なんだよ！」

虹「君にはそんな場所はないと言っのか！」ガシッ

リン「そしてこれこそ、まさに犠牲……」

虹「しかしこんな同士たちも居るのだよ！彼らがこの世界のどこかに居る限り……やめられない止まらない……いいや、止めることなどまさに愚行！」

リン「今まで自重してきたさ！だってこんな世界の端っこで叫んだって、鼻で笑われるだけじゃあないか！俺は今、一時だけでも、無気力雑食系キャラを捨て、蝉と一緒にこうして熱く叫んでいる！」

虹「そもそもブログの内容からしてこういうのはあえて避けてきたんだけど、『もういいんじゃない？』ってなっちゃったのも事実！さあ裸になろうぜ野郎ども！」

クリス「……意味がわからないんだけど……」

（分からなくていい、ただ、忘れてくれなければ……）

はっぴーはるういん！

カーテンの締め切られた部屋。

人種・年齢を考えるとずっと大柄な晴光は、同じ年の、平均以上の顔を持ち合わせた女友達をそろりと見た。

濃紺の瞳は細められ、桃色の口元は弧を描く。斜め上から見ると彼女のまつ毛がやはり長いことを再確認した。相変わらずの美少女っぷりである。

晴光はその視線を下げる。

視線の先、目の前のテーブルにはお猪口ほどの小さな陶器のコップが鎮座していた。

真っ白い中には、緑色の液体がなみなみと、淵から溢れんばかりに満たされている。

彼女、エリカは間違えて一目ぼれしそうな人が出そうなほどに、魅力的に笑っていた。

「・・・・・・・・あの」

「なあに？」

「・・・・・・・・これ何？」

「・・・・・・・・お茶ね」

「・・・・・・・・へーえ、そー・・・・・・・・」今の間は何だろっ、という無粋なことは訊かない。

（絶対違うー！！ー）

晴光の頭でもわかる。



だってお茶は蛍光色ではないのだ。

だってお茶はこんなに濁ってないのだ。

（だってこのお茶“溢れんばかり”っていうかもうこれ溢れなきゃ可笑しいんじゃない？っていうレベルだし！ただの匂いと味の付いた水がこんな粘着性ありえないし！！）

目の前には笑顔の美少女魔女。

しかし魔女は魔女でも、死んでも魔女っ娘なんて名乗れない、黒いローブと鴉と古城が似合うかなり本格的な魔女だった。

ウィンだから。

だってほら、ハロ

^ ^ ^ ^ ^ ^ ^ ^ ^ ^ ^ ^ ^ ^ ^ ^ ^ ^ ^

作者は英語が凄く苦手です。

ケルト人の1年の終りは10月31日で、この夜は死者の霊が家族を訪ねたり、精霊や魔女が出てくると信じられていた。これらから身を守る為に仮面を被り、魔除けの焚き火を

## エリカの説明書

スティール「・・・ねえ、なんでエリカちゃんって仲良くなるとコミュニケーション能力が低下するの？」

ニル「エリカですから・・・」

スティール「なんで彼女、自己主張が全部暴力なの・・・」

ニル「彼女、野性動物なんですよ・・・」

スティール「意志疎通ができないよ・・・お互いこぶししか交えないもの・・・人間なんだから言葉を使おうよ・・・」

ニル「それができなくなっちゃうんですって」

スティール「あの見た目で本能に生きる女って、どうなの？」

ニル「そこはほら、エリカですから・・・」

仲良くなると、極端に毒舌になって手が出る足が出るようになるエ

リ力。

本音丸だし、本能のおもむくまま行動する。たまに意味がわからない。本人は何も考えてない。

知らない人や仲悪い人には逆に愛想よくなる。ニコニコして、人当たりのいい才女のイメージ。

ある程度仲良くなると猫かぶるのがめんどくさくなっちゃって、基本的なコミュニケーションもなんかもうめんどくさいのよね・・・。普段、打算で計算された笑顔で生活してるぶん、オフになると「もういいや」ってなる。

お腹すいたら食べるし、暇なら蹴ってくるし、眠けりや寝るし、イラッとしたらまた蹴ってくる。ニル（パートナー）は、全部分かって行動してくれてる。これが彼女なりの甘え方。

淑女の外見に、野性動物（猫科）の中身。

「なんかもうめんどくさい」が口癖になる。

晴光相手には「馬鹿じゃないの」が口癖。ニルとはあんまり話さない（だいたい通じるから）。

一番よくしゃべるのは、信頼の差かスタイル。毒舌でばんぼん攻撃。

「お兄さん大人気ない」から始まり、「名前が長い」とかもうそれイチャモンじゃないの・・・ってなる。

お兄さんは冗談が通じる人なので、その場では「ええ〜酷いよー」とか言っても、引きずらないし、むしろ「もつと言って!」っていう。面白いからいいじゃん。

エリカはSの自覚は無い。ただ、涙目になってるのを見ると、ちょっと興奮するっていうか。キュンと高鳴る胸の鼓動。本能的なところで、可愛い子をいじめるのが好き。  
隊長の涙目？ごちそうさまです！

その気になれば器用なのでたいていのことは完遂できるけど、そこまで向上心は無いからもう少し出世したら「そこそこ優秀」なイメージのまま、仕事続けたいわ。って思ってる。

出世欲は無いけど、自分の居場所の環境向上にはとことん努力する

## 体重・身長設定

身長と体重のリスト。主人公組は、横線。

140?台

(虹) 143?

(朱羽) 145?

(ロキ) 145?

(ビス) 147? 36kg

150?台

(ミーナ) 150?

(ファン) 152? 35kg

(アン・エイビー) 155?

(クリス) 156?

(アリス) 157?

(明) 158?

160?台

(チャック) 160?

(雪女) 164?

(イモムシ) 165?

(白兎) 165?

(エリカ) 166? 55kg

(ハートのK) 167?

(ニル) 168? 60kg前後(増えたり減ったり)

(エル) 168?

170?台

(アイリーン) 170?

(シオン) 170?

(爛) 170?

(凜) 171?

(Q) 172?

(ヤマネ) 174?

(ダイモン) 175?

(帽子屋) 176?

(アンブレラ) 177?

(スティール) 178?  
62kg

180?台

(忍) 180?

(ハンプティ) 180?

(晴光) 180? } 75kg } (成長中)



(チエシャー猫) 183?

(リユー) 187? (身長と体重が釣り合わない)

190?以上

## 馬鹿の説明書

周 清光の説明書

- ・昔から、良く身内に「お前は馬鹿だねえ」と言われて育った。
- ・実は自分もその通りだと思っている。
- ・でも条件反射とその場のノリで、「違うし〜」とか言って笑いを取る。

・目の前の人が笑っていると自分も幸せ。

・実は結構空気を読む方。たまに読み間違えるけど。

・たまにどうしようもない、失敗を仕出かす。

・それなりに痛い目に遭う。

・見兼ねたダレカに、助けてもらう。

・人運だけはある。むしろそれしか無い。

・末っ子気質。

・最終的には、何もしなくても周囲の機転で事は終わってる。

・張り切って自滅するタイプ。

- ・しかし普段から行動力はある。
- ・思い立ったらすぐ行動。何にも考えてない。
- ・また怒られる。
- ・猫より犬派。
- ・猫の気ままさも、嫌いじゃない。かけ〜!と思う。
- ・でも飼うなら犬だ。
- ・賢い大型犬に憧れる。世界名作劇場的な。
- ・チープなヒーローに憧れがある。
- ・「俺は正義の味方だー!」とかポーズングして言ってみたい。
- ・実際言ってる夢を見る。
- ・速攻で忘れる。「いい夢みた!」「へえー、どんな?」「忘れた」
- ・やれば出来る子。
- ・マンツーマンで、根気よく、コツを掴めばサラッと出来るようになる。
- ・むしろ達人? 苦労が嘘の様に、しっかりモノにする。

- ・なので、何だかんだ言っても結構頼られてる。
- ・周囲は、「今のお前があるのは誰のお陰だと思ってんだ」
- ・とか言いつつ、実は「あいつすげえなあ」と、本人居ない所で褒められてる。
- ・結果、色んな人に可愛がられてる。
- ・「さんがお前の事褒めてたよ」と言つのが、効果的。
- ・年下の前だと、年上ぶる。
- ・優しいので慕われる。
- ・年上にモテる。
- ・年下にもモテる。
- ・同世代にはモテない。面白くないから。
- ・知らない所で、悪口も言われてる。でも、本人の耳に入る事は絶対に無い。
- ・人得最強。
- ・やっぱり馬鹿。

## てめえの笑顔に殴り込み（主人公3人）

「あいつの笑った顔が嫌い」

テーブルに額を押し付け、エリカがふいに、そう呟いた。

我らが第六部隊にあてがわれた部屋は、管理局の本館地下から行ける元資料室である。補足すると、既存の夢人部隊は1〜5まであって、それぞれ本館、第五別館までを宛がわれている。

元資料室は地下ゆえに窓が無く、中心には会議室に余っていた折り畳みの長いテーブルを4卓とパイプ椅子が6脚。部屋の隅に5卓目のテーブルと簡易キッチンセット、資料の入った本棚だ。

資料といっても、第六部隊が使用する資料だ。決して元資料室の名残なわけじゃない。

無駄に広い元資料室・現第六部隊舎は、長テーブル4卓を添えてもまだ広い。たった3名の隊員、パートナーの本の一族を入れても6名。たとえまともな隊舎では無くとも、本棚の詰まっていた元資料室の広さだけは持て余すほどだった。

今日は第六部隊にとってのしばらくぶりの休暇である。しかし背筋を伸ばしている印象の強いエリカも、任務明けの休日出勤には脱力しきって机に頬を押し付けている。

報告書を書き上げないことには休みなどはないのだ。早く終わらせなければ、むしろ貴重な休暇が消費されていくばかりである。

本の三人はちょうど不在で、室内にはエリカと晴光、ビスの三人のみだった。

「あいつ？」

「あいつはあいつよ……」

晴光が首をかしげるも、さっさと全部終わらせたエリカは完全に低充電モードである。こうなっては、「もうめんどくさい」「眠い」

が口癖。固有名詞を出すのもめんどくさい。筋金入りだ。

「……あの野郎の顔が腹立つ」

普段は絶対に口に出さない荒れた口調だった。

「ニコニコしてんじゃねーよ……」

「エリカ、寝ぼけてる？」

「……」

返事は返ってこない。

「……寝てるみたいですね」

ビスは妙齢の女性がと思わないでもないが、この低充電モード時のエリカには何を言っても無駄なことは短い付き合いながらなんとなく理解している。ヘタをすれば藪について蛇が出るだろう。

「寝るなら帰って寝ろよー風邪ひくぞー」

「うるさい」

案の定、晴光が声を掛け脛を蹴られていた。

帰り際。

「さっき寝言言ってたけど」

「寝言じゃないわ。寝ぼけてただけ」

「……同じじゃね？」

ああ、また藪について蛇を出している。

そんなあなたに言いたい5題×6（+おまけ）

「……この中で一番体が弱いつてどついうことですか」

「いいじゃないですか可愛くて」

「あんなガキが……？」

「やーい鉄面皮」

「ちよつと笑うか何かしましょうよ……」

「俺、冷え症持ちなんだよね！」

「……実は弟より妹の方がほしかったんだ」

「ロマンだよロマン！」

「……女の子がそういうこと言うんじゃないありません！」

「あ、今グサツときた……」

「君、実は口悪いでしょ」

「本当……恐ろしいこと考えるよね」

「これは趣味だから」

「いいじゃない。可愛いものの好きなんて女の子らしくて」

「……その一物もぎ取ってやるわ」

「顔だけ見ると、ランドセル似合いそうな顔してるよな」

「これでも成人してるんですけど……」

「君って、活字ならなんでもいいの？」

「アイツは頭がいいんじゃないわ……ただ雑学が多いだけなのよ」

「お前はあいつのオカンか」

「頭の中までおめでたいんだから……」



「この馬鹿！」

「そつ、それをお前が言うなよ！」

「やるときややれるんだよね」

「俺、猫より犬派だから！」

「ボールとコントローラーが恋しい……」

「体調管理は基本です！」

「例えるなら……春色新色？」

「恋する乙女は強いわよ」

「……白衣の天使ならぬ、桃色天使？」

「彼女に手を出したらロリコンですよ」

おまけ：第六部隊12題

「このカラーリング・・・異端戦隊いれぎゅうー?」

「みんなのオカナイエロー!」

「桃色白衣の天使ピンク!」

「最年長ブルー!」

「ミステリアスホワイト!」

「熱血馬鹿一代レッド!」

「クールビューティーブラック!」

「この中で一番小さいのが隊長です」

「わかるか!? ティーンの中に一人だけ二十代半ばのお兄さんの気持ち!」

「一番大人げなくせに……」

「駄目だよ抜け駆けは。ピンクはみんなの妹だから」

「ツンデレとクーデレの素敵なコラボ！」

「うちのイエローはカレー食べるんじゃないよ。作るのが専門なんだよ」

「……これ、RPGもいけんじゃね？」

お好きに料理してください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6273m/>

---

IRREGULAR短編集

2011年3月8日02時13分発行